

第四章 飴屋踊り、万作踊り関係資料

第一節 台本、記録類

凡例

本節では、飴屋踊り、万作踊りに関係する台本、記録類を掲載する。台本は可読性の高いものについては画像で掲載し、その他のものについては文章に改めた。記録については文章に改め、適宜、翻刻した。翻刻にあたっては、誤字、当て字、誤記などを含め、底本の表現を尊重したが、通読の便を考慮し、適宜濁点等を追加した。なお、判読不明な字については■で示している。

1 土橋の万作踊り

記録

(1) 大正拾・十一年度費用支出遊藝回顧録

おどり連中内野菊治

イロハ順

石渡正三氏

同 安蔵氏

大久保兵助氏

内野直義氏

柴原元治郎氏

石渡米作君

鮫島助太郎君

同 新之丞君

鮫島與一君

鮫島群次君

柴原平輔君

持田弥太郎君

同 富蔵君

以上踊子八人

一人割負擔

金 貳拾貳錢五厘

記

踊連中費用支出ノ部

大正十年二月十一日紀元節ノ吉祥日ヨリ

一金 壹圓八拾錢

石渡安蔵様宅を借り踊稽古始め祝酒肴代

師匠

二月十六日

一金貳圓五拾錢

大久保五十吉君

大久保松五郎君

和田宇三郎君

内野菊治君
柴原重一君

以上踊子五人

後者加入の印酒肴代

一人割負擔

金五拾錢

二月二十日

一金 貳圓貳拾五錢

卷煙草(敷島)

十五個ノ代

但シ柴原元治郎様宅ニ興行ノ有馬大正踊(八

木節)連中へ祝儀ニ出ス

踊子十三人

一人割負擔額

金 拾七錢宛(二・二二・)

(四錢不足)

三月一日

一金 貳圓

大久保兵助様宅ニ囃子踊興行ノ同御連中へノ

祝儀(向丘村平)当連中で手踊りを試む

一金壹圓拾五錢

△内譯(單位錢)

○・六〇 御園固練白粉一個代

○・三〇 クラブ類紅一個代

○・二五 牡丹刷毛一個代

以上踊子十三人一人割負擔出費額

金參拾錢宛 (三・九〇)

『去ル二月二十日ノ不足 金四錢ヲ差引キ共有
殘餘金七拾壹錢也』

三月十三日

一金貳圓

前ノ稽古場ハ段物ニ手狭ヲ感ジタレバ柴原師
匠ノ才宅ヲ拝借シテ其處ニ引越ス ソノ印ノ
酒肴代

備考 其ノ前

鮫島群次君

持田富蔵君

連中ヲ退去ナサレタリ

三月二十一日

一金參圓貳拾錢

石渡安蔵様宅稽古場ノ御禮

太織疊四枚ノ代

鮫島郡次君ヨリ金五拾錢頂戴

負擔踊子十一人

一人分出費額 (八・貳〇) 8.20
金七拾錢宛

『三月十三日附 二十一日附
2円 + 3円20 = 5円20
踊子十一人
円. 70 × 11 = 7円70
十一人出費合計
郡次君
7円70 + 円. 50 = 8円20
8円20 - 5円20 = 3円00
三月一日附共有殘金
¥3.00 + ¥. 71 = ¥3.71 共有殘高

¥: 円ノ略シタモノ

共有殘金

參圓七拾一錢也』

四月四日

一金參拾五錢

銀紙

口紅

細紐

合計代

四月十日

一金貳圓

大久保松五郎君豫備役に召集せられたるに
付き錢別

歸郷の後手拭一筋に敷島一個宛を添へ連中の
各一人々々に下されたのは却ってお氣の毒の
至りでした

四月十五日

一金五圓九拾錢

祝儀を贈られた方々を招待して是迄に出来
上った衣装の披露旁ら聊か御禮の意を表すべ
く馳走に買ひたる酒四升代並びに踊用小物の
代

附記 ■ 連中が是までに祝儀を頂戴した方々
へ全部

柴原伊勢松様が蕎麦を拵え膳部を整へて種々
大分な御馳走を連中の為めにして下された御
厚志は誠に感謝に堪へぬ次第であります。

踊子十一人

一人の出費額

金六拾錢宛 (六・六〇) 6.60

四月四日附 十日附 十五日附
 ¥.35 + ¥2.00 + ¥5.90 = ¥8.25

一人出費額 踊子十一人
 ¥.60 × 11 = ¥6.60

三月廿一日附

共有残金

¥6.60 + ¥3.71 = ¥10.31

¥10.31 - ¥8.25 = ¥2.06

共有残金

貳圓六錢

四月同日

一金壹圓貳拾貳錢

二月十三日以後ノ内野屋通帳勘定

石油二升餘ノ代

(二升六十錢ノ割) 共有残金ヨリ支拂フ

共有残金

¥2.06 - ¥1.22 = ¥.84

共有残金 八拾四錢

収入記載欄へ繰越

四月二十日

一金貳圓拾錢 共有金ヨリ内野屋支拂

△内譯(單位錢)

一・〇〇 裏地 一反代

一・〇〇 晒 一疋代

〇・一〇 木綿糸 代

四月二十一日

一金貳圓 共有金ヨリ支拂フ 高津村坂戸へ踊

リニ行ク時御同道ナサレタ大久保ハナ、大久保

フミ御兩名へノ祝儀

五月五日

一金拾六圓拾六錢 共有金ヨリ支拂フ

△内譯(單位 錢)

二・〇〇 酒代

一・〇〇 菓子代

馬絹庚申講中様ヨリ頼マレ村社ノ神樂殿ニ

踊リ折悪シク勿幕頃ヨリ雨ニ降り込メラレ

テ寒サモ多少加ハリタレバ退屈凌ギニ盃

ヲ揚ゲ目出度ク散會ス

〇・五〇 子供ヲ遣ヒニ頼ミテ

〇・〇二 蠟燭一本代

〇・四〇 白足袋一疋代

〇・七五 美顔固練白粉一個代

二・二〇 衣裳ノ縫賃

一・〇〇 筭一貫匁代

八・二九 内野屋通帳勘定

内譯

三・八〇 花色裏 二反代

二・四〇 正花裏地 二反代

一・五三 赤モス 三丈四尺

・一五 毛孺子 三尺五寸

二二 青梅綿 一ツ代

一三 紺三子糸 代

六 赤三子糸 代

五月七日八日 總計金參拾七圓貳拾七錢

一金六圓五拾錢

△内譯(單位錢)

二・六〇 縞・裏地 二反代

一・四四 新モス 三丈六尺

一・〇八 更紗 一丈八尺

・四五 縞 新モス 三尺

・三〇 木綿 二口

・二五 硯 一個

・一八 墨 二丁代

・二〇 花王石鹼一個代

以上内野屋支拂

一金拾貳圓八拾貳錢

△内譯(單位錢)

七・六〇 遠州上等 四反代(師匠の御禮に用

フ 一反 一・九〇)

三・二〇 天竺大巾 三丈二尺代

一・〇八 紺足袋 二足代

・七七 白足袋 二足代

・一七 モス襟 一掛代

以上馬絹有馬屋呉服店支拂

一金參圓六拾錢

上酒三升代

馬絹川場龜ヶ谷商店支拂

一金貳圓參拾五錢

△内譯(單位 錢)

一・八〇 饅飩・蕎麦代 各十五把宛

・四五 車麩 三本代

・酢 二合代

以上内野屋支拂

備考

時節柄農繁期に入りましたから一先づ踊

の稽古を休み二月以来嚴冬の候にもかゝらず師

匠に大変お骨折りを掛けたほんのお禮の印迄に右

の品を買って大久保善四郎様方でお世話になり聊

か心ばかりの御馳走をしました

なほ 三月廿九日 稽古場を都合上柴原師匠の

お宅から大久保善四郎様宅に引越し今日まで引続

き稽古をして居りましたのでお恥しい乍ら御両家
へ次のやうにお禮の印をしました

一金參圓 柴原元治郎様宅の量代

一金五圓 大久保善四郎様宅の量代

一金參圓 稽古のため借用の石油代

一金壹圓 衣裳の縫賃

以上 前記の師匠のお禮にした反物四反代

の外

踊子十一人

一人分

金壹圓五拾錢宛

出費合計金拾六圓五拾錢分擔してその残額

金貳拾圓七拾七錢共有金より支拂ふ

附記 師匠

石渡安藏様は他の師匠へ比し連中が踊を學んだ

事が僅少でしたので止むなく手拭地半反をお禮に

しました 今後熱心に稽古をつけて頂くべき師匠

は同氏を除いた他の四名の方々

五月八日

一金壹圓

寺留守居 鈴木竹次郎様へ祝儀 共有金ヨリ支

拂

此の夜鮫島兼五郎様のお世話様になり釋迦の花

祭を祝ふて正福寺で踊る

自 四月廿日

至 六月末日 上半期支出計

金四拾貳圓參錢(但シ此處ニハ四月十九日以前

ノ出費ヲ除ク)

備考 自2月11日

至6月30日

支払總計

金八拾貳圓九拾錢

檢定済

七月十四日

一金 貳圓貳拾五錢

石渡桑藏様宅へ張出舞台を掛けて踊る

△内譯(單位 錢)

〇・八〇 上等繩一把代(舞台掛けに用ふ)

〇・五〇 ランプ拝借料

右小計金

壹圓參拾錢 共有金ヨリ支拂

〇・六〇 石油一升代(右 舞台へ點燈分)

〇・三五 美顔白粉一個代

(以上石渡米作君の寄附金九拾五錢)

七月十五日

一金六圓參拾六錢
舞台を取こわした後石渡様へお世話になりて

鉢洗ひを行ふ

△内譯(単位 銭)

三・六〇 酒 三升代

一・四〇 蕎麦 三十五把

・二〇 蒟蒻 六個代

・六〇 するめ 十枚代

・五〇 煎餅 代

・〇六 酢 一合代

一金老圓貳拾六銭 鶏卵 廿一個代

一金拾四銭 卵折一ツ代

以上共有金ヨリ支拂フ

八月八日

一金拾圓七拾八銭 共有金ヨリ支拂ふ

正福寺を借りて踊り稽古を始む

△内譯(単位 銭)

六・六〇 太織豊 六枚代(稽古に寺の畳を成

るべく破らぬやうガマ上敷を買って敷き其の

上で踊る)

一・五〇 酒 一升代(踊り始めのため目出度く

乾盃して祝ふ)

一・〇〇 寺留守居 鈴木竹次郎様へ祝儀

・八五 瀬戸引菓罐一個代

・八三 三分心入 角燈一個代

八月同日

一金貳圓

此の日柴原藤五郎様宅に興行の梅

鶯一座の浪花節を御主人柴原氏に

招かれて聞きに行く。同氏へ寸志

として出す 共有金ヨリ支拂

八月十八日

一金貳圓 有馬八木節連中のお宅で行はれた

同大正踊を見にゆき御茶菓子料と

して同御連中へ出す 共有金ヨリ

支拂

九月十四、五日

此の日は東京市外渋谷町八幡宮の祭禮で大

和田横町から頼まれて連中数名と有馬の囃子連

中の方々と一處になって面白く踊る 十四日は

折悪しく雨天でしたので荷物を運ぶに困難した

が午後の四時頃から二階座敷で夜の十二時頃ま

で踊り翌十五日は雨上りの舞台で困り乍らも午

後から夜の十時頃まで踊り十六日の朝お暇まし

た 頂戴した祝儀中から玉川電車往復賃金、二

子渡船場増水酒本其他諸雑費を差引き残金なし

その内の脇差・硯・筆・石鹼・頬紅・口紅・

白粉などを持ち歸って連中一同で使用する事に

した

出席者

師匠 柴原元治郎氏

石渡正三氏

和田宇三郎君

内野菊治君

柴原平輔君

石渡米作君

鮫島四太郎君

鮫島新之丞君

鮫島與一君

九月十七日

一金參圓參拾銭

八月七日附内野や通帳勘定 共有金ヨリ支拂

△内譯(単位銭)

一・七〇 木炭一俵代

・五五 石油一升代

・三五 こんろ代

・三五 美顔白粉一個代

・三〇 茶飲茶碗十個代

・〇五 第一本代

九月同日

一金貳圓 雑費共有金ヨリ支拂

九月十九日

一金貳拾七銭 土瓶一個ノ代

共有金ヨリ支拂

十月一日

一金六圓 遊藝稼人ノ税金

無鑑札では他村へ頼まれても公然と行つて踊る事が不可能なので左記の御兩名へお願いして師匠と連中とへ各一枚宛の鑑札を受けた

△内譯(単位 錢)

一・五〇 大正十年度縣稅

〃 村稅 石渡正三氏納

一・五〇 縣稅

〃 村稅 柴原元治郎氏納

一金五拾錢

至急鑑札を下付して貰ふため郡役所まで往復の自轉車拝借料 以上共有金ヨリ支拂ふ

十月六日

一金壹圓 壹錢 共有金より内野屋支拂

△内譯(単位 錢)

・三五 御園白粉二個代(八木節連中ノ方へ)

〃

・三〇 ミツワ石鹼一個代

・〇一 水引一本代

一金壹圓八拾壹錢五厘

鶏卵廿三個代 共有金より支拂

此の日は當字鎮守の秋季祭禮で青年中より躍を依頼されて青年共同で前日お宮に舞台を掛けたが折柄不順な天候續きとて通り雨の合間に連

中も大変骨を折つて働いたが六日になつても依然空模様陰悪で禰宜様は降雨中に祭を仕舞はれたが夕方漸く雨が止んだので泥濘の庭へ敷物を運ぶやらランプ屋を呼びに行く者舞台へ飾付をするやら天手古舞ひを演じたがそれでも幕を刎ねるまで降らなかつたのは幸

を刎るまで降らなかつたのは幸ひ。(ママ)

なほ有馬の八木節連の方々をお願い申して幕合

ひに大正踊をやつて頂いたので一層賑やかさを加へた 翌日舞台を一緒に方付けて青年一同で

目出度く鉢洗ひして散会

自七月一日 (共有金)

自十二月末日 下半年支出計

金參拾八圓七拾參錢五厘

備考 自7月1日至12月31日

支出總計金三九円六八五

因みに十月六日青年會土橋支部の収支決算を左

に掲ぐ

収入花金合計

金五拾八円五拾錢

金參拾四圓 當所戸主一同より

外に収入 金拾錢

ズ金 九拾貳円六拾錢

諸費支拂ノ部(単位 錢)

一八・九六 手拭十五反ト八ツ

一四・五〇 酒一升(龜ヶ谷商店より買ふ)

參・〇〇 菓子(小間物支拂)

參・〇〇 手拭二反ト四本

・一二 手拭一本

貳・貳〇 炭一俵

五・〇〇 有馬八木節連へ御禮

なほ八木節連へは青年役者一人分式拾錢宛

出費して十人で金式圓祝儀を出した

五・〇〇 踊連中の御禮

四・〇〇 角ランプ(舞台點燈)十六ノ代

・五〇 石川■■■連へ祝儀

一・一〇 蠟燭二箱

・二〇 半紙四帖

・一五 簾三本

一・〇〇 石渡龜吉様へ舞台用材料借用ノ御禮

〃

・五〇 大久保兵助氏へ竹損料

一・〇〇 駐在所へ進物(巡查不出張ニ付き)

四・五〇 酒三升

合計金

六拾四円七拾參錢

差引

金 貳拾七円八拾七銭

右剩餘金

外二寄附

繩 三把 三田常蔵様

麥稗 三十把 鮫島久左エ門様 (雨後ノタメ

庭へ敷ク)

大正十一年

一月廿日

一金五圓 昨年八月八日以来稽古場に借用の

正福寺へ御禮 (共有金より支拂ふ)

二月六日

一金五圓八拾九銭 共有金より支拂ふ

△内譯 (單位 銭)

三・〇〇 木炭代 (但シ一円二一貫分)

(石渡亀吉様より買フ)

二・三〇 手拭二反代

・〇四 右手拭入れ袋四ツ代

(内野屋支拂ヒ)

・五五 (大正十年九月二十日附内野屋

通帳勘定) 石油一升代

一金参圓参拾銭

△内譯

二・〇〇 上酒一升代

・六〇 味醂代 (一合廿五銭ノ物)
・七〇 塩煎餅代

備考

本日新年の懇親會を開き旁ら稽古始めを
する為師匠をお頼みした

今度大久保弥五郎君が連中へ加入せられ

鮫島興一君が東京へ行かれ不在となった

ので

踊子十一人

一人の會費金 参拾銭宛 (合計参圓参拾銭)

持寄つて酒や煎餅を買ひ四人の師匠さんには

前記手拭半反宛を年玉として差上げ味醂は御

酒を餘り召上らぬ師匠さんにお進めした

二月十六日

一金貳圓 共有金より支拂ふ

晝間より稽古をしてゐる間暴風雨

となり歸宅に困難なれば凌ぎに菓

子煙草を買ひ夕飯の代用として夜

間まで稽古を續けた

二月十七日

大久保弥五郎君に仲間入れの印だといふて御

酒を御馳走になった

二月十七日

一金五圓 共有金より支拂ふ

東京府荏原郡蒲田村大字蒲田新宿一二五一

二月十八日
桶田延之方に鬘を誂へた内金

一金貳圓 共有金より支拂ふ

山内村石川踊連中へ鑑札二枚を賃與し踊見

物旁ら遊びに行き花を掛け手踊をした

二月二十日

一金壹圓参拾九銭 共有金より支拂ふ

△内訳 (單位 銭)

〇・三四 麻 代

・三三 御園白粉 一個代

・二二 レート粉白粉一個代

・二〇 同

・一五 黛 一本代

・〇六 口紅 代

・〇五 ぐんじよう 代

・〇二 竹長 代

・〇二 おざんざい 代

二月廿八日

一金貳圓 竹行李一個代 (共有金より支拂ふ)

△以下附記無きものは共有金よりの拂出

三月一日

一金壹圓七拾銭 蒲田の鬘屋に支拂し後金

△鬘代の内譯 二月十七日に出来合を貰つ

て来た

○武士

○前鬘 一個 五拾錢宛

計壹円

同日誂へた

○島田 二個

○女鬘 一個 各九拾錢宛

計貳円拾七錢

○翁

○千日

○百日 (五分月代) 各六拾錢宛

○武士

○前鬘

計參円

累計金六圓七拾錢也

四月四日

おどり連中假装して稲田堤に花見を催す充分

の興を■し折柄の花の雨にあいたり

出席者 芳名

芝原重一君

和田宇三郎君

柴原平輔君

持田弥太郎君

石渡米丸君

鮫島助太郎君

// 新之丞君

大久保弥五郎君

師匠

石渡正三君

特別加入

三田金三君

會費全額金七円五拾錢割前各自負擔

なほ俄雨に納屋拝借の席料金壹円三田金三君が

支拂ひされたり

一金貳圓貳拾錢

花見手拭に使用

十五いづの分

四月八日

一金壹圓 佐倉炭二貫匁代

四月十五日

一金五圓七拾錢

△内譯

四・〇〇 酒二升代

・六五 御園固練白粉

・二五 五錢蠟燭五本

・一八 白扇一本代

・五五 石油一升代

・〇七 繪扇一本代

四月拾五日

柴原源次様が時節柄多忙も顧みず不格好な鬘

を手入して見よく繕つて下さつたのは誠に感謝

に堪へぬ次第です今日は柴原伊勢松様方へ舞台

を掛けておどる

四月廿五日

一金參圓 遊藝稼人納税

△内譯

一・五〇 石渡正三納

一・五〇 和田宇三郎納

四月廿八日

神木山等學院の大護摩■頼まれて踊りその

夜歸りて休憩のため茶菓子料

金壹円五拾錢

金 五拾錢

向丘駐在所へ遺物

筭一貫匁の代

○柴原重一君が右に一貫匁を寄附

され追加して二貫匁を進上して

下さつたのはお気の毒様でした

五月八日

金拾六圓九拾五錢

時節柄農繁期に入れば一時おど

りの稽古を休み師匠へ礼などす

△内譯

八・円四〇 縞反物四反代

四・〇〇 前記太物に添へ師匠四名へ禮

二・〇〇 手拭二反代

去月十五日柴原伊勢松様宅へ舞台を掛け

て踊り世話になつたその寸謝

一・五五 内野屋通帳勘定

茶 二拾錢

石油二升 一円拾錢

手拭二巾 二十錢

■黛 五錢

一・〇〇 去月廿八日神木不動尊へ頼まれし

踊の打合せに依頼した大久保師匠

へ寸志

自 一月廿日

至 五月八日 支出計

金五拾五圓八拾參錢 (但シ共有金よりの支拂)

備考 自一月二十

至五月八日

七月十二日

金參圓 師匠大久保兵助氏の病氣御見舞

七月廿日

金四圓

△内譯

二・〇〇 稽古始 祝の酒二升代

一・〇〇 菓子代

一・〇〇 稽古為寺留守居 鈴木竹次郎氏へ

焼酎一升餘

大久保五十吉君連中を漸次に退去なされたり

九月廿日

和田宇三郎君上京につき鑑札を廃さる

同君連中を退去さる

十月廿六日

金四圓五拾錢 遊藝稼人納金

△内譯

一・五〇 村税 和田宇三郎君納

同君 立替金支拂

一・五〇 村税 石渡正三君納

同氏 立替金支拂

一・五〇 縣稅 石渡正三君納

同氏 立替金支拂

鯨島助太郎君翌年一月十日近衛歩兵一聯隊へ

入営につき此の月連中を退去さる

十二月廿七日 金 拾錢 石油二合 (内野や通帳勘定)

自七月十二日

至十二月廿七日 支出計

金拾壹圓六拾錢 (共有金支拂)

(2) 大正十一年度寄附者御芳名記録

おどり連中

記

大正十年 三月

二十一日 柴原師匠のお宅で連中始めて扮装し

て踊った祝儀は始めての事なれば全部お返し致し

ました

四月

四日 大久保卯之助様宅で踊る (第二回)

△蛇の目傘 一本 石渡正三様

△無双着 二枚

△女帯 二本

△襦袢 一枚

△細紐 五本

△前掛 一枚

△無双着 一枚 鯨島豊吉 同 繁様

△鐘 一個 石渡安藏様

△扱帯 五本 (五色) 石渡龜吉 梅田助太郎

十五日 柴原伊勢松様宅で踊る (第三回)

◎此の日連中に對して過分な御馳走を拵えて下

された御主人の御厚志は誠に感謝に堪へぬ次第で

特に記録に留めて置く次第です

△柳行李 一個 石渡喜三郎様

△女帯 二本 大久保為吉様

△手拭 一反 持田富義様

△襦袢 二枚(赤白)

扱帯 一本 大久保善七様

■揚 一

△化粧用鏡 一個

前隠し 四枚

△鬘 四

レト白粉 一個 柴原源次様

口紅 一個

一金五拾銭 三田甚平様

△菓子 一袋

一金參圓 内野庄蔵 鮫島豊吉 同繁様

一金五拾銭 大久保為吉様

反物一反 馬絹三ツ又長屋連中五人様

十六日 鮫島政右衛門君の婚禮披露の座敷の餘
興に頼まれて踊る(第四回)

廿日附 金貳円 鮫島留五郎様より頂戴の金子

はその当日夜の祝儀なり

二十日 柴原師匠のお宅で踊る(第五回)

一金貳圓 鮫島留五郎様

一金壹圓 大久保新助様

一金壹圓 小倉廣次郎様

△反物一反 内野濱次郎様

△反物一反 鮫島瀧蔵様

△一反風呂敷

腰巻二枚 大久保喜市様

△鏡一個 小間物屋

■様

△衣(青)一枚 石渡清吉様

△花簪二本

繪扇二本 石渡正三様

一金參圓 馬絹中組青年有志様

一金貳圓 平囃子連中様

一金貳圓 馬絹川場亀ヶ谷商店様

△反物一枚 馬絹有馬屋呉服店様

一金貳圓 有馬八木節連中様

一金貳圓 有馬八木節御連中ノ内伊藤庄治様

一金壹圓 有馬八木節御連中ノ内内田仁平
持田春治 伊藤嶋吉様

△上草履五足 鮫島貞次郎様

二十一日(第六回)

高津村坂戸の連中石渡米作君の御親戚へ頼ま

れて行き踊る

一金拾圓 坂戸青年一同様

一金貳圓 坂戸瓦屋 吉田彦次郎様

一金壹圓 坂戸 前島弥太郎様

一金貳圓 宇奈根 今井キセ様

二十八日(第七回)

馬絹小台川の上の押田浅吉様方へ頼まれてゆ

き踊る

一金貳圓 馬絹小臺 押田浅吉様

一金貳圓 馬絹小台 青年有志様

一金壹圓 馬絹小台 押田信太郎様

一金壹圓 馬絹小台八幡下 安藤傳次郎様

五月

五日(第八回)

馬絹村社前庚申堂新築落成に付きて同講中よ

り頼まれて村社神楽殿で躍る

一金拾圓 馬絹 庚申講中様

一金壹圓 馬絹 尾幡弥太郎様

一金壹圓 馬絹 田辺直右エ門様

一金五拾銭 馬絹 篠田倉蔵様

一金五拾銭 三田秀三様

八日(第九回) 正福寺で釋迦の花祭を祝ふて躍る

一金貳圓 小倉清吉様

一金壹圓 内野庄蔵 鮫島瀧蔵様

一金壹圓 大久保卯之助様

一金壹圓 柴原彦七様

一金壹圓 大久保安五郎様

一金壹圓 柴原藤五郎様

一金壹圓 三田秀三様

一金壹圓 石渡子之吉様

一金壹圓 馬絹 濟藤直三様

一金壹圓 馬絹 田辺勇次郎様

七月

十四日(第拾回)

石渡桑藏様宅へ舞台(張出)を掛けて踊る

一金參圓 鮫島留五郎様

一金壹圓 柴原伊勢松様

一金壹圓 三田常藏様

一金貳圓 下有馬 青年有志様

△天幕一掛(踊ひいき) 文字入

大久保善四郎 柴原元治郎様

△上酒一升 下ノ谷 祭禮當番より

十五日(第十一回)

梶ヶ谷 様方に頼まれて行き踊る

一金拾圓 梶ヶ谷 青年中様

九月

一日(第十二回)

馬絹 様方に頼まれて行き踊る

一金拾五圓 馬絹 青年中様

二十九日(第十三回)

の舞台で躍る

一金五圓 下作延より

十月

六日(第十四回)

當所の青年中より依頼されて土橋神社へ舞台

を掛けて躍る

一金五圓 當所 青年中様

一金貳圓 内野庄藏様

△天幕一掛

舞台出入口掛幕一對

右品を金五圓を託されて調達し『豊年

躍』の筆者大久保千代吉氏に薄謝を

致したその剩餘金

一金 七拾七錢

大久保新助様

大正十一年

二月

十一日(第十五回)

大久保一良様に頼まれて御宅で踊る

一金貳圓 御主人より寸志として頂戴す

一金五拾錢 山内村石川 大久保直次郎様

十八日(第十六回)

一金參圓 山内村石川踊連中へ鑑札二枚を賃

輿しその御禮として貰ふ 舞台にて

手踊をせり

二十日(第十七回)

一金 拾圓 向丘村神木青年團の總會を同

會より頼まれ等覺院本堂で踊

り化粧料として頂戴す

一金參圓 同團より祝儀

四月十五日(第十八回)

柴原伊勢松様方へ舞台を掛けて踊る

一金壹圓 馬キヌ 尾幡フミ様

一金壹圓 犬藏 村野栄作様

一金五拾錢 村野倉藏様

一金五拾錢 馬絹 篠田倉藏様

一金五拾錢 当所地藏堂止宿 名古屋シゲ様

四月廿八日(第十九回)

神木等覺院不動大護摩の餘興に依頼され舞台

にて踊る

一金貳拾圓 神木山等覺院執事

一金五圓 東京府下世田ヶ谷池尻金子自轉車店

一金壹圓 平 石坂清助様

一金壹圓 長尾 井田一五郎様

(3) 大正十一年度決算書 遊藝連中

記

踊連中収入及び収支決算書

◎大正十年度

四月十五日

一金八拾四錢 支出欄記載四月十五日附

連中出費共有殘金繰越

一金四圓 祝儀全部

四月二十日

一金拾六圓 祝儀全額

四月二十一日

一金拾五圓 "

四月二十八日

一金六圓 "

五月五日

一金拾參圓 祝儀全額

五月八日

一金拾壹圓 "

自 踊始め

至 六月 上半期収入計

金六拾五圓八拾四錢

自 四月二十日

至 六月末日 上半期支出計

金四拾貳圓 參錢

(四月十九日以前ノ費用全部 支出ノ部

ノ計算済)

差引殘高

一金貳拾參圓八拾壹錢

共有現金(後期繰込)

七月十四日

一金七圓 祝儀全額

七月十五日

一金拾圓 "

九月一日

一金拾五圓 祝儀全額

九月廿五日

一金五圓 "

十月六日

一金七圓七拾七錢 祝儀全額

自 七月

至 十二月 下半期収入計

金四拾四圓七拾七錢

自 七月

至 十二月 下半期支出計

金參拾八圓七拾參錢五厘

差引殘高

一金六圓參錢五厘

右六圓參錢五厘に前期繰越の金貳拾參圓

八拾壹錢を加算して踊連中共有現在金

一金貳拾九圓八拾四錢五厘

(翌年度繰越)

大正十年十二月末日檢定済

大正

【この間に脱落ありか】

(前年度繰越金)

貳拾九圓八拾四錢五厘

差引殘金

貳拾參圓壹錢五厘

(後期繰越)

自 七月

至 十二月 下半期支出計

金 拾壹圓六拾錢也

(此期間無収入)

(前期繰越)

差引殘高

金拾壹圓四拾壹錢五厘

(来年度繰越金)

(4) 大正十二年度金銭出納並經過記録 遊藝連中

大正十二年

二月十一日

退去 柴原重一君結婚のため

加入 石渡幸蔵君

鮫島米吉君

大久保源蔵君

〃 桂君

柴原總吉君

一金貳圓七拾錢

△内譯(單位錢)

六〇 酒五合

七〇 焼酎五合

五〇 煎餅

以上〔稽古始の祝いに〕

稽古始寺ノ留守居鈴木竹次郎君へ

九〇 焼酎一升

一金五拾錢 木炭代

三月一日(第二十回)

持田弥太郎君方へ舞台を掛けておどる

一金壹圓五拾參錢

△内譯(單位錢)

六〇 御園固練白粉一個

三〇 〃 粉白粉一個

一五 黛 一本

二五 五錢蠟燭五本代

一二 豆絞り手拭一筋

一〇 舞台掛用繩ノ代

備考 謝禮ノ進物及寄附

・舞台掛用繩 鮫島氏寄附

・丸太借用 半紙二帖手拭一筋

伊藤半三郎様へ 進物

・板借用

石渡九十郎様へ 〃

・舞台を掛け世話になりし持田弥太郎様へ

手拭一反進上

當日花金奉納者芳名

金壹圓 大久保五十吉様

金壹圓 伊東仙太郎様

金壹圓 鮫島勇吉様

金壹圓 持田英太郎様

金壹圓 馬絹長坂上 菊田屋様

金壹圓 〃三ツ又 都倉信太郎様

〃 清吉様

吉田糸三様

金貳圓 有馬 伊藤正治様

内田仁平様

持田正治様

内野金三様

三月三日 師匠内野直蔵氏

【欠落有】

三月七日 去る二月十一日新加入の門弟の方々

五名が加入祝の印とお酒を出され

た舊門弟としては酒はお気の毒でし

たが師匠と連中一同で心よく御馳走

になる

三月十日 柴原重一君方へ舞台を掛けて踊る

此の日初午大々に賑はふ(第二十一

回)

一金八拾五錢

△内譯(單位錢)

三〇 花簪二本

二〇 石油 五合

二〇 舞台掛繩

一五 草履 二足

備考 謝禮の進物

一 舞台を掛けて世話になりし柴原重一様へ

反物一反

一 舞台材料借用ノ石渡正三様へ 手拭一反

一 全 石渡糸三様へ 半紙二帖 手拭二筋

當日花金奉納者芳名

金壹圓 鮫島兼五郎様

金壹圓 大久保正信様

金五拾錢 大久保善七様

金老圓 神木 寺嶋貞治様

三月廿七日

一金貳圓 下有馬 參宮講依主の芝居へ奉納

三月廿八日

神木等學院の大護摩供養に依頼されて舞台上で

踊る(第二十二回)

一金六圓七拾八錢

△内譯(單位錢)

二・二〇 袴用反物一反代

一・四〇 袴仕立代

・六五 美顔固練白粉一個

・一二 化粧用顏刷毛

・〇一 ランプの芯

・五〇 白砂糖

二・〇〇 菓子代(その夜帰りに茶菓子を食べ

べ休憩し目出度く散會)

當日花金奉納者芳名

金貳拾圓 神木山

金老圓 舞台を掛けられた 平 石坂清助様

四月三日

時折柄農繁に入れば稽古を休む

一金五圓 昨年二月以来稽古場に借用の正福

寺へ薄謝

一金貳圓 師匠二名へ反物一反に添へて寸志

一金拾貳圓六拾四錢(内野や通帳勘定)

△内譯(單位錢)

四五 石油一升

五〇 編笠一ツ

〇八 ランプのかさ一ツ

二・三〇 木炭一俵

〇八 石油二合

二八 半紙四帖(一帖七錢)

二〇 手拭二本

一・〇〇 手拭一反

四〇 石油

一五 半紙三錢ノヲ五帖

一・九〇 反物一反

三・三〇 反物二反(反一・六五)

二・〇〇 手拭二反

大正十二年度上半期決算

自 一月

至 四月三日

○収入

三月一日(第二十回目)

金八圓 花金總額

三月十日(第二十一回目)

金參円五拾錢 〃

三月廿八日(第二十二回目)

金貳拾老圓 神木山謝禮及花金合計

合計

金參拾貳圓五拾錢也

○支出

自 二月十一日

至 四月三日

合計

金參拾六圓九拾九錢也

○差引不足金

四圓四拾九錢也

大正十一年度繰越金拾老圓四拾老錢五厘

◎差引残高

金六圓九拾貳錢五厘(後期繰越金)

四月十二日 石渡米丸、鮫島竹之助両君が東

京より金九圓にて三味線の中古

物一棹を購求して来られたり連

中持とす

舊門弟

各自費金老圓宛

計六圓 石渡米作君

鮫島新之助君

内野菊治君

柴原平輔君

持田弥太郎君

大久保弥五郎君

新門弟

各自費金五拾銭宛

計式圓五拾銭 大久保桂君

鮫島米吉君

石渡幸藏君

大久保源藏君

柴原總吉君

一金九圓 不足金五拾銭を共有金より支出

四月廿五日

一金參圓 遊藝稼人税金

村、縣税共 壹圓五拾銭宛

石渡正十郎氏納

五月十五日

橘村新作一五六五 橘教会（一心講）

宮田辰五郎様方に有馬八木節連中と共に頼

まれて舞台で踊る（第二十三回）

一金貳圓七拾五銭

△内譯（単位銭）

五〇 引幕借用代

（前に引幕を連中で都合して来てくれと

の依主方の依頼あり向丘村平石坂清助

様にお願して高庄呉服店より借りて貰

ひ又置して頂く）

二・二五 石渡清助様謝禮上酒一升代

一金貳圓 當日衣裳附に御同伴の大久保花、芳

兩名へ祝儀

當日収入

金拾九圓

備考 八木節御連中とその夜の歸途別盃を掲げ

金子を程よく分割して愉快に別る

後日宮田様より橘教会印入の手拭一筋宛

連中へ下さる

五月十六日

一金貳圓貳拾五銭 筭五貫目代 単価四十五

銭 駐在所に預て警察へ進

上

五月廿八日

踊子全員瓦斯縮辨慶縞の揃い単衣着を新

調一反

一金貳圓七拾五銭 自費

一金五円五拾銭 柴原、石渡両師匠へ一反宛

進上

一金參拾五圓七拾五銭 十三反の代

誂へた高庄呉服店では連中のため苦心して

特價品を提供さる

六月廿九日

一金拾四円八拾五銭

馬絹有馬や呉服店に誂へてメリンスの襦袢

の袖揃ひを新調 十一人

各金壹圓參拾五銭宛 自費

七月一日

馬絹菊田や飲食店新築落成披露の餘興に依頼

されてその新座敷にて（第廿四回）

当日収入

金九圓 菊田屋より

当日奉納ありし花金全部を頂戴

金參圓 菊田屋新築職人六名より

九月十日

一金參圓 去る九月一日の大地震にて前師匠内

野直藏氏の居宅全潰につき震災御見

舞

九月十一日

震災のため七部通り倒潰した稽古場正福寺

の家起しに踊連中有志で手傳ふ

十月十五日

過般突如関東を襲ひし未曾有の大震災のため

世間慘状に鑑み踊連中殆ど解散に等しく稽古

その他を中止せり本日柴原師匠のお宅にて名

残り会を開く

一金拾七圓九拾四銭

△内譯(單位錢)

五〇〇〇 酒二升五合代

一〇〇〇 うどん 拾把

一〇〇〇 せんべい

・六〇 一升

・三四 砂糖 二百匁

一〇〇〇〇 柴原石渡両師匠へ薄謝

一〇〇〇 宿薪代

大正十二年度下半年決算

自 四月十二日

至 十月十五日震災のため中止当日

○収入

五月十五日(第二十三回)

金拾九円 橘教会謝禮總額

七月一日

金拾貳円 菊田屋謝禮及祝金合計

四月十二日

金八円五拾錢 中古三味線購入費

五月廿八日

金參拾円貳拾五錢 瓦斯縮単衣着新調

各自辨合計

六月廿九日

金拾四円八拾五錢 メリンス襦袢新調

合計

金八拾四圓六拾錢也

○支出

自 四月十二日

至 十月十五日

合計

金九十圓五拾四錢也

○差引不足金

五圓九拾四錢也

前期繰越金

六圓九拾貳錢五厘

◎差引残高

金九拾八錢五厘也

大正十二年十月十五日

震災に打撃を受けし世間の復興するまで踊稽古

その他を休むにつき柴原平輔君の希望通り連中

所有の湯わかし、茶碗など譲り其の売却金を右

残金に加へなほ不足を各自に出費して金參圓と

なし鑑札の税金に充て後日石渡正三君にお渡し

致したり残金なし 以上

大正十二年十月十五日

大正十三年一月三日

各自費合計

一金參圓 内野直藏氏香奠

前師匠内野直藏氏遂に死去致され本日葬儀を執行されしは誠に哀悼の至りなり吾等門弟すなはち五拾錢宛を出費し前記金額となし罹災のパニツクにて葬儀を行はれし彼の際の事故 柴原平輔君連中を代表して葬式に列席さる

大震災後の世間が復興するに伴い震災にて疲れ切つたる人心の慰安を求むべく自然遊藝に興味を持つ者漸く多くなり一時殆ど全滅となりし帝都及び附近の演藝界の復興の存外速なるに従ひ鄙にも觀劇や手踊の見物を希望するもの頻りに起り遂に御最良様方の勤めに依り大正十三年二月廿日の吉日を以て災後解散に等しき遊藝連中はこ々に再び倍旧睦まじく柴原重一君のお宅を拝借して愉快に稽古に取り掛る事と相なりたり

(5) 大正十三年三月吉日金銭出納並遊藝經過

記録帳おどり連中内野菊治

大正十三年三月四日(初午)

柴原重一君方の庭に舞台を掛け去る二月一日より十日間指導せし橘村新作の踊連中を招き賑々敷く開演

△花金其他受入

金壹圓 内野留三郎様

金壹圓 石渡亀吉様

金壹圓 柴原政義様

金壹圓 〃藤五郎様

金壹圓 〃源次様

金壹圓 鮫島兼五郎様

金壹圓 内野濱次郎様

金壹圓 大久保正作様

金貳圓 大久保弥五郎様

金五拾銭 〃五十吉様

金五拾銭 横山藤吉様

金貳圓 鮫島留五郎様

〃 久左衛門様

〃 常吉様

小倉清吉様

石油一升 和田松五郎様

金参圓 新作手踊連中様

金貳圓 上有馬青年有志様

金貳圓 大蔵青年有志様

金壹圓 馬絹 菊田屋様

金壹圓 坂戸 磯崎芳太郎様

金壹圓 馬絹高山 安藤忠五郎様

金壹圓 馬絹 尾幡八十様

金五拾銭 有馬 持田留吉様

収入合計

金貳拾四圓也

△拂出

金五圓 祝酒

金参圓 木炭代(但し稽古其他に使用)

金壹圓五拾銭 半紙一帖に添へて舞台使用板

借用の禮

金貳圓貳拾五銭 蕎麦及化粧品代

金参拾銭 茶菓子代

金五拾銭 石油一升代

金壹圓貳拾銭 遣物玉子廿一個代

金拾参銭 菓子折及びのし代

金参圓 柴原重一氏宅

稽古場豊代

金四圓 柴原石渡両師匠へ謝禮

金参圓拾貳銭 至三月五日鉢洗費

四月三日

有馬川野重五郎様方に頼まれ石渡氏米丸君が

労を折って掛けられた張出座敷の舞台で牛久

保の踊連中の伊勢音頭、新川踊及当時流行の

安来節に鱒掬ひ踊りこれには台坂の持田万三

君が加入せられて面白く互に楽しい餘興を盡

し節句当日とて大賑はいを呈せり

金壹圓 当所 内野や餅倉様

八百圓様

金五拾銭 当所 持田庄治様

金五拾銭 当所 川野廣吉様

金壹圓 当所 川野伊三郎様

金壹圓 牛久保 踊連中様

金五拾銭 山田 織茂清二郎様

金壹圓五拾銭 当所 持田剛様

〃 桑三助様

〃 熊治郎様

川野忠一郎様

〃 安五郎様

金壹圓 野川 中里庄蔵様

金五拾銭 牛久保 安藤増五郎様

金壹圓 当所 内田林蔵様

金壹圓 山田 酒井牛五郎様

金壹圓 鈴木スミ様

持田リウ様

金五拾銭 当所 持田勤様

金壹圓 牛久保 皆川由蔵様

金貳圓 当所 唐戸藤蔵様

持田三蔵様

内田仁平様

金老圓 山田 吉浜久蔵様

市川ハナ様

飯塚ツル様

金老圓 当所 内田倉之助様

金五拾銭 馬絹 板倉様

金四圓 有馬青年様

酒一升 有馬 台万様

以上花金合計

金貳拾圓五拾銭

踊連中その全額を頂戴し内

金五圓五拾銭

宿川野重五郎様方へ置く

△差引収入金拾五圓也

△拂出

金老圓七拾五銭 ビール三本代

金貳圓五拾銭 敷島煙草拾個代

金貳圓 稽古場畳代として柴原重一様へ寸謝

金拾銭 半紙代

金貳圓 石渡米丸君が參圓餘にて袴、頭巾を

新調され寄附されし残額

合計金七圓參拾五銭也

共有現金七圓六拾五銭也

(四月四日現在)

台本

(一) 土橋万作踊り台本(保存会より提供)

土橋踊り

一、ハア 土橋なあ キタシヨ よいとこ

一度はおいでよ アリヤヨイサ

竹のお宿にヤンデエ雀なくよ

アーコリヤコリヤ

ヤートコセーヨンヤーナーアリヤンリヤ

アーコレワイセーコーノヤートコセー

二、ハア 春のなあ キタシヨ 野に出て

七草つばめよ アリヤヨイサ

矢上川瀬のヤンデエ水の音よ

アーコリヤコリヤ

ヤートコセーヨンヤーナーアリヤンリヤ

アーコレワイセーコーノヤートコセー

三、ハア 目出度なあ キタシヨ 目出度の

若松様はよ アリヤヨイサ

アーコリヤコリヤ

枝も栄えてヤンデエ葉も茂げるよ

ヤートコセーヨンヤーナーアリヤンリヤ

アーコレワイセーコーノヤートコセー

四、ハア 踊りようなあ キタシヨ 踊る人

ありやどこの人よ アリヤヨイサ

あれは土橋のヤンデエ色男よ

アーコリヤコリヤ

ヤートコセーヨンヤーナーアリヤンリヤ

アーコレワイセーコーノヤートコセー

瀬田の唐橋

瀬田のなあアー キタシヨ

唐橋 唐金ぎぼし

ソレ 欄干樺に敷板檜に日の出山 ソレ

こちらにみゆるが伊吹(むかで)山 ソレ

あちらに見ゆるが石山寺で

遙か向こうに見ゆるのが ソレ

六万石の本田様 ソレ

お屋敷お江戸で八丁堀

水に映るのが ヤンレ

膳所の城よ

ア、コリヤコリヤヤトコセーエー

ヨンヤーナア

アリヤンアリヤーア コレワイセエー

コーノヤトコセーエー

島田金谷

島田アナーアー キタシヨ

金谷の旅籠屋の娘よ アリヤヨイサ

ソレ お客を見かけてかけ出して ソレ

お泊りなれば泊まりやんせ ソレ

お風呂もどんどど沸いてます ソレ
昨日奥から広間の畳の表替え ソレ
序いでに行燈障子も張替えて ソレ

お嫁も昨晩もらいたて ソレ
お酒の相手がいるならば ソレ

新造に禿に中年増 ソレ

日の出のよいのも御座んする
袖や袂にヤンレ 艶の文よ

ア、コリヤコリヤヤトコセーエー

ヨンヤーナア

アリヤンアリヤーア コレワイセエー

コーノヤトコセーエー

新川踊りの唄

一、おーサ あれが新川地曳の娘か

成る程よい娘よあの娘と添うなら

三年三月も裸でなりとも

薔薇でも背負いましょう

(踊り子) ウントコ背負たらベラボと重たい

それは又愚かよ例へ火の中

水の底までもよ といは致さぬ

アレワノセーエー ヨーホーエー

二、おーサ 新川のお婿さんとなるには

お家のご商売網をもすいたり

掛けたり干したり浜網よったり

はっぱんの付けよや荷縄の締め掛け
帆の上げ下げ手綱の加減は誰にも負けない
鮎でも押しましょ

(踊り子) ヤレオーセーソコダイ
わしも腹から船頭さんの子なれば

おもかじ取りかじ知らいでどうしよべなあ

アレワノセーエーヨーホーエー

オーサ 新川で蛤ほゝ堀りやるとも

真実お糸さんと添わなきやならぬぞえー

アレワノセーエーヨーホーエー

三、お此処で新川をほめるのは

いけ過ぎだがどなたもご免なさい

笠井下町新川名所は女子のよいとこ

当初氏神門出はお稻荷さんよ

東の権現様修行して拝みなさい

前と出て見な利根の大川上りや下りの

高瀬や茶船が数多名所する

アレワノセーエーヨーホーエー

オーサ 新川目出度かりける次第なり

大津絵 (斬られ与三郎)

おーシャ シャ シャン シャン

門口に誰やら人の声

与 「まっぴらごめんねおかみさん お富さん

いやさ お富 久しぶりで」

お富「そう云うお前は」

与 「おお俺だ 与三郎だお主や この面」

お富とは
お積迦様でも気がつきやしよめい 主ある
この身と知らずして はまりこんだが身の困

果

与 「江戸の親には勘当され よんどころな

く

こここにこうしていようとは お積迦様

でも気がつくめ…

こうこうこのきずは誰がした

いやさ此のきずは誰がしたんだよ」

お富 今この様をば察して見てくん

お富 今この様をば察して見てくん

お富 今この様をば察して見てくん

お富 今この様をば察して見てくん

お富 今この様をば察して見てくん

勝五郎箱根山

お富 今この様をば察して見てくん

お富 今この様をば察して見てくん

お富 今この様をば察して見てくん

お富 今この様をば察して見てくん

お富 今この様をば察して見てくん

勝五郎「おお 寒いながらも吾は車の上

なれば 辛棒もしようが

曳くそなたはか弱き女的身

さぞ寒かったであろう

おお大義であつたよな」

初花「勝五郎様ともしたことが

女房に改まつて

礼云う者がござんしようかいな」

勝五郎「それはそうとこの阿弥陀寺は

北条氏政公の菩提寺にて

今日の法事を手掛かりに敵の安否を

いやいや壁に耳あり徳利に口あり

必ず必ず御油断召さるなよ」

初花「アイアイ」

「曳くやあ…初花ヤンデー箱根山よ

アーコリヤ コリヤ ヤートコ

セーエー ヨンヤナーア

アリヤンリヤーア コレワイセーエー

コーヤートコセーエー

かつぱれ

一、^へカツポレカツポレ 甘茶でカツポレ

塩茶でカツポレ ヨイヨイトナ

沖の暗いのに白帆がみゆる

アヨイトコリヤセ

あれが紀の国 やのそれやれこのこれ
わいさのさ

ヨイトセツセツセ

みかん船じゃえー さてみかん船

二、^へそれ一かけ二かけ三かけて

四かけて五かけて橋かけて

可愛いあの娘を乗せかけて

下からもち上げりや なんのことない

あまりセツセしたさにすりこぎを入れて

それおセセのあれわいさのこれわいさの

尾ビラに帆が咲いた このなんでもせ

三、^へホラ豊年じゃ万作じゃ

明日は丹那の稲刈りで

小東にからげてちよいと投げた

投げた セツセ

枕に罪咎はない それおセセの

あれわいの これわいの

尾びらの帆が咲いた これなんともせ

四、^へねんねこよ おころりよ

ねんねのおもりはどこへ行つた

あの山こへて里へ行つた

お里のお土産何もろた

でんでんたいこにしようゆの笛

ねろてばよー ねろてばよー

芝山内

ねろてばねないのは この子はよ

^へ芝のなあ…キタシヨ

山内勝負^{はたし} 蹴よ アリヤヨイサ

富三「そこへ行くのはお美代じゃねえか」

お美代「そう云う声は富三さん さつき入

谷の松源であれ程云うてきかせて

おいたのに私を此処まで追つてく

るお前の心はえ…」

富三「芝居の文句じゃねえけれど お前

待ち待ち 蚊に喰われ お巡査さ

んには咎められ ぞつこん惚れた

この富三 いやでもあろうが

草の根枕にうんと云いね」

お美代「又富さんその事かえ…」

富三「嫌とありや仕方がねえ」

お美代「アレエー」

^へ呼べど叫べど ヤンデエ人はこぬよ…

アーコリヤコリヤ ヤートコセーエ

ヨンヤナーア

アーリヤンリヤ アコレワイセーエー

コノヤートコセーエー

与市兵衛

^へオーイオーイ おやじどの…

その金 四、五日貸してくれ……

アーキタドッコイ

聞いてびっくり与市兵衛はぎょうてんし

いえいえお金じゃござんせぬ

娘がしてくれた用意の握り飯……

アーキタドッコイ

どりやどりや お先に参じます

アーキタドッコイ

やれ待てしぶといおやじ奴と

なんの苦もなく一えぐり

すっぱぼんとうち出すね二ツ玉

サーノサ

粉屋踊り

〴〵オイトコソウダヨ 今出て踊るのがあれが

また白升の粉屋の娘さんかよ 成る程よい

娘よ あの娘と添うなら 水も汲みましょ

手鍋も提げましょ 三度に一度は

人の眼を忍んで お飯も炊きますよ ソレ

粉屋の娘さんよ

〴〵オイトコソウダヨ 粉屋のお婿さんと

なるには 承知できなきなら おらがまた粉屋

は一代二代の粉屋じゃござらぬ

十代伝わる粉屋であればなお

粉の箱担いで西は七浦東は九十九里

西の果から東の果てまで

ぐるりぐるりと廻りて 売らずばなるまい

よ ソレ 粉屋のお婿さんよ

台詞(驚坂番内と家来二人以上)

主従 「ありやありやありや干瓢」

番内 「干瓢でなし椎茸椎茸じゃなし 時に

家来 「何だっけ」

家来 「あの蒲鉾屋にある半片」

番内 「ああその勘平」

家来 「ああその勘平」

番内 「おのが主人の塩屋判官高貞と」

家来 「おのが主人の塩屋判官高貞と」

番内 「おらがお旦那の師直様と」

家来 「おらがお旦那の師直様と」

番内 「何か殿中の奥の間の真中で」

家来 「何か殿中の奥の間の真中で」

番内 「べつちやくちやくべつちやくちやくと抜

かすが最後」

家来 「べつちやくちやくべつちやくちやくと抜

かすが最後」

番内 「腰の小脇差しちよいと抜いて

チョイチョイと行った

お屋敷ピツシヤリこと閉門で」

家来 「お屋敷ピツシヤリこと閉門で」

番内 「青竹がらがら」

家来 「五寸釘かちかち」

番内 「あおかぼは居たか」

家来 「あ居たな 居た居た居たな」

番内 「その時 おかぼに逢うた時」

家来 「レコを少々零したが

おかぼは拾いはせなんだが」

番内 「おかぼ下郎に渡しやよし」

家来 「何だいやだ」

主従 「いやだなんだとじゆくねると」

番内 「おのれの上顎かつかめ」

家来 「下顎かつかめ」

主従 「みりみりさりと引裂く」

番内 「勘平返答」

主従 「なな何と」

勘平 「でもよい所で驚坂番内おのれ一把

じや 喰い足らねども この勘平の腕の細

さや

細根深料理安杯して見しようか」

主従 「強いこと云やがるきついことを」

家来 「もうしもうし旦那様 一分や二分

の給金で命的うにや賭けやせぬ

お旦那様は御氣根次第に

おやりなさい

家来は一足お先に参ります」

番内 「これこれ待つてくれ家来共やい

兎角戦と云うものは腹が減つては
いけぬもの

そこらあたりに飯屋茶屋があるな

れば 急いで炊かせる家来共やい」

家来 「めいめいとかしこまってござい
ります」

番内 「かしこまらずに立つて参れ参れ」

家来 「メイメイメイ」

番内 「兎角戦と云うものは大敵なりとも

おそるるな

小敵なりとあなどるな敵が強いと

見たならば

背中に帆をかけ足で櫓をもみあ

えつささえつささと逃げるが奥の手

家来共やい 敵が弱いとみたならば

打つてかかれよ 家来共やい」

家来 「ありやありや」

勘平の動作（腕の戦いをする家来を蹴飛ば

し 番内の腕をねじ上げ 打伏せて

足蹴に背中を踏まえて）

勘平 「突かうと切らうと颯り殺しにしよう

とも こちの儘」

（おかる かけよつて袂をおさえて）

おかる 「殺しやしやんすな勘平さん その

や下郎を殺したなら

殿のお詫びの邪魔になる

もうそれはそれでよいわいな」

番内 「おおそうともそうともおかぼの云う

通り云う通り おのれ下郎を殺し

たなら殿のお詫びの邪魔になる

こう云う時にや何でもせつせと

拭みつ尻で さつさと逃げるが

蟹の真似蟹の真似」

勘平 「夫婦一先ず身をやつし」

おかる 「上総名物白升粉屋」

二人 「夫婦仲良く粉でも引こうかいな」

〱オイトコソウダヨ 粉を曳くともきたやれ

そこだ

勘平 「ゾッコと決めこめ ぐるりと廻せば

今度は一番粉になりそうだ」

おかる 「おやおやおやおや あんたと私と

よい事いたしてこしらえた粉だもの

よい粉が出来ぬでどうなるものかね」

勘平 「一升ます持つてこい」

〱ハハ量るともきたやれそこだ

オイトコソウダヨ

白升の粉屋は繁昌繁昌で目出度し目出度し

鏡山（奥庭の場）

……尾の上女中の其の下にお初と云う女中

がいた。岩藤は奥女中で 或る時殿様

の前でぞうりでたたかかれて恥をかかさ

れた その仕返しの場合……

（お初 女が庭よりでる）

〱奥庭に忍び込み 折節雨が降る

（岩藤 傘をさしてでてくる）

岩藤 「そこにいやるはたれじゃ 何物

じゃ」

お初 「はい 中老尾の上殿の召使い下女の

初奴にござります」

岩藤 「おのえ殿の下女の初とやらだが許

るしてこの奥庭へ」

お初 「だれの許るしも受け致しませねど昨

日おのえ様 御殿よりおもどり急の

お病氣になられました故 お局様に

はごほうばい故 お主人様のお病氣

見舞うて下されますようお願いに参

りました」

2 長井町飴屋踊

記録

(1) 昭和四九(一九六四)年、長井小学校上演時のパンフレット

岩藤 「尾の上殿ご病気となつてはほうばい

のよしみ見舞うてやりましょう 初

とやら案内しや」

お初 「有難うございます どうぞこちら

へ」

(岩藤 シヤクを起す)

岩藤 「アイタタ アイタタ」

お初 「お局様のおシヤクの妙茶は所持致し

ております」

岩藤 「シヤクの妙茶所持しておるとな 早

よう早うよう」

お初 「おシヤクの妙茶お召し上り下されま

せ」

(お初 ぞうりを出す)

岩藤 「これは ぞうりぞうり」

(と びつくりする)

お初 「ふつりふつり」

(と 云つてぞうりを振り上げる)

おシヤク シヤク シヤク

| | | | |
|---|---|--|--|
| <p>七日蓮經 鈴木隆行 高橋頭</p> | <p>唄 進藤友吉 嘉山常吉 龍崎慶造 森良助 小和田八造 折山正之助 鐘龍崎政造 三味線 原田英子</p> | <p>嘉山久造 小林滝三 鈴木龍造 池永幸吉 老鳴島</p> | <p>西風流 西風 十九代 TEL 五六一五七七</p> |
| <p>西風流 西風 十九代 TEL 五六一五七七</p> | <p>営業品目 鮮魚 卸小売 凍水と餌料の販賣 冷凍食品の卸小売 乾物類の卸小売 冷凍冷蔵加工 水産加工</p> <p>長井水産株式会社 代表取締役 嘉山定治 TEL (0468) 56-2170 (代表)</p> | <p>洋品・呉服・綿・肌着類 小知和洋品店 TEL 五六一三三九</p> | <p>中華井類一式 ニコニコ支店 TEL 五六一七〇一</p> |
| <p>長井漁港(新宿泊地)前 たばこ・菓子 松岡商店 TEL 五六一〇五〇</p> | | | |

日時 昭和四十九年十一月十六日午後一時開演
会場 長井小学校講堂(入場無料)

横須賀市無形文化財
第一回
長井町飴屋踊発表会

主催 新宿町内会
後援 横須賀市教育委員会

台本

(1) 現行の演目の台本 (保存会より提供)
かきがら踊り

海頭 アレミサレ ナハヨーアレミサエ ミ

サエーナア

ナゼカソウダヨ ナンデモシヨウ コリ

ヤコリヤ

一 夏目ノ台デナ ソコラデ海オ見レバナア

リヤオモシレ

オモシロヤオモシロヤナゼカソウダヨナ

ンデモシヨウ

カキガラ〜カキガラホリガナソコ

ラデシリオフリマアースナア

オンヤコラノコズマノ程良イ所デお客ノ

オマケニイモ シトツカツプレ

オーフリヤオーフリヤナゼカソウダヨナ

ンデモシヨウ

沖カラ沖カラ

オヤ沖カラ汐サシヤユダンガナラネー

沖カラ汐ガナソウダカサースヨークルマ

アーデナア

コリヤナハアヨーオオホイエー

サアー沖カラアア汐ガサースヨサアシク

ラバーナア ホリタールカキガラワ南

アゲ汐デナガレルカアラ ミカゴナンゾ

オモテキナサイヨウ ジョウリンナンゾ

オ手ニトモツテナ マンガオーカツイ

デーナ アミカゴナカニトツニメーコー

ムノーニ ワヤーレヘレヘレソーレヘレ

ヘレステコメンドツコイ ウントコシヨ

ツタラベラボウニオモタイ

ナンタラゴトダトアガリメサレバナアオ

ヤソノアト

ソノアトデソノアトデナゼカソウダヨナ

ンテモシヨウ

オヤ長兵サンダ長兵サンダオヤ長兵サン

ダ長兵サンダサー長ベト金三郎トおさよ

マザリノサークノシヨウトエ

昔ナジミノ色事バナシヨ タガイチガイ

ニツツキアツテ

ヤーテクル向ウカラ アレオミソメテア

ガルベトスレバ

トンダ所エフミコンデドブリドブリトヌ

カリコンデナー

ケツマズイテコロンデナー腰骨オイタメ

タエヒザノカワマデスリムイテ人ガミタ

ラバワラウカト思ツテナ カニオトルフ

リオシテソコイラココイラオ ナゼマワ

スレバミシマオコシニササレターノウエ

ナクガサツラオ ハチガサスソレマタオ

ロカナコトダヨーカニニキンタマオマタ

ハサマ

レタ オヤオーイテデ(イタカンベ)イ

タイワナ アマツカナチガデテ、オーウ

テテ オーイテイテイテノウダンナサン

デアガリ メサリ

しらます粉屋

頭 ソリヤ しらますの こなやの アリセ

オイ

一、オイトコソウダヨ 今でて踊ルノガ ア

レガシラマスノ粉屋ノ娘カ成ル程良イ娘ダ

アノ娘 ソウナラ お水モクミマシヨ テ

ナベモサバマシヨ 三度ニ一度ハ 人ノ目

オシノンデ マンマモタキマスヨ ソリヤ

ムコニ ヤレナリタイ アリヤオイ

二、チヨイト ムコダヨおムコニナルニワ

オロカジヤ ナラレヌ アノマタ粉屋ガ一

代二代ノ粉屋ジヤゴザラヌ

先祖ノ代カラ チヨウド 私デ十代ツタワ

ル 粉屋デゴザレバ お家ノゴサホウ ソ

ムイチャナラナイ カタガヨワシト ナキ

ナキナガラモ 粉ノ箱カツイダラ西ノ方カ

ラ東之方イト グルリトマワリテ セラズ
バナルマイ

ソリヤ コナバコノ カツイデ アリヤオ
イ

三、チヨイト早イゾ粉ノ箱カツイダラミナ
サマゴゾンジ 東海道ワヨ五十ト三次 ヒ
ロイトイエドモ ナカデワトリワケ サヨ
ノナカヤマヨナキノ石ワマ。タ。名所デゴ
ザルヨ ソノマタアタリノ小松ノコカゲヤ
小杉ノアイダカラ十六七ナルアネサンタチ
ガマタ ノボル道者ヤクダル道者ノイヤダ
トユウノオムリニヒキズリコンデ アメデ
モチヨウ セクヨニセラズバナルマイヨ
ソリヤコナオヤレ ヒクウトウモ キタヤ
レソウコダ

(ムコ) オヤソコソコソコトモテキナヨイコ

ガデキル

(娘) オヤオヤオヤオヤオマエノコダモノヨ

イコガデキネデトウスルモノカ

(ムコ) ドウスルモノカ

(娘) コソウヤコソウマステモモツテコイ

歌 ハアカールトウモ サアヨー アンオコ

ワヨイコダ

ドウデモ 眞實 ソワ十六リヤ ナラヌ

アリヤオイ

ねんねこ

よいひとつ・・・ふう・・・これわの・・・
これわのようお

1. 人はとも故二人の仲は、切るに切られぬ

糸櫻

2. 襖ひとへは恋路の関よ、明けて結れぬ岩

櫻

さあ黒いもので申そうならば鳥にがつしよく
たどんやの手間取り忠臣蔵夜討に坊さん衣に
火の見やぐら人形使いにさのこりやまだよ

わたしや子ども三人持ち一人の男の子はよい
町にかけま 後の女の子の二人は、よたかに
ふなまんじゅう、ザーコリヤまだよおい
一つとや一人のお客は屋根舟よ ちよき舟

よ、船頭さんが二人で大急ぎ はやがへり
二つとや深川なな橋やわしやいやだもうあき

たおたべにべんてんまつい町ときわ町
三つとや見あげた仲町横に見て右に見て今

じゃこしん町で苦労する 心から

(言葉) 「こねだもよう、権現様のお祭で村の

若い衆と話をしたよう、この子が
泣いてばかりいて、ちつとも話を

させなかつたのよ」

ねろてばようねろてばようねろてばねねの
かこのがきやよ

言葉「わたしやこんな泣く子のお守りは上
手だよ」

上手でござります、ねんねこしよう ねん
ねこしよう ねんねのお守りは、どこいつ
た、お山をこしてお里いた。お里のお土産
になにもろた。でんでん太鼓にしようの笛、
おきあがりこぼしに風車

新川

歌詞

1 このさあはあいや、あれが新川地曳の娘
か、なるほど良い娘だ。あの娘と添うな
ら三年三月もはだかになるとも、ばらで
も背負いましょう、(言葉) 「しこたま
しよつても何ともなかつた」それは又お
ろかよ、たとえ火の中水の底までもない
とは致さぬあんれはさあ、婿にやれなり
たい。

2. このさあはあいや、婿になるには、お家
の商買網でもすいたり、かけたたり、干した
り、あばづなようたり、あばの付けようと
帆の上げ下げ、みなわのわけよと、手なわ
のとりよと、りようほうのかけよは、誰に

も負けない櫓をおします。(言葉)「ありやおせおせそこぢ」ありや私も腹の中から船頭さんの子なれば、おも舵、とり舵知らねえで何としましょうか。あんれわさアーまきのたぶねーえはまぐりよごうリヤールとも、おいと眞実そわなけりやナーハア

3. このさあはあいや、ここにかさいをほめるのは無理だがどなたも御免なせえ、かさい下まへ新川名所は女の良い所でなぜと云ふのに東照氏神、熊野の権現さんに、かとりのお稻荷さんを修業しておがめよ、前を出て見る利根のだい川のぼり、下りにたかせやちや舟のあまた名所は、ありやおめでたや

高砂の歌

一 やれそうだよ播州姫路の高砂浦のナぢいさまとばさまが
箒を片手に持ち熊手をかついで御籠をしよいてナ
宝の山に登りしつめてナ 金銀黄金を掃きよせかきよせ さらりとよせてな 御籠えつめて歸るとすればな
下なる小池をのぞいて見ればナ女亀に男亀が

ヒョウソウそろえて空をながめる上なる松には、鶴の巢ごもり、おめえの松わナ目出度い松だよ オヤお目出たい。

二 ヤレそうだよ播州姫路の高砂港にや出舟が千双で入舟が千双で はるか沖中ながめて見ればナ、御舟がチロチロ高砂み舟帆印を見ればナ打出のこづちを帆印につけてナ、港へ乗り来る いかりを下ろして高砂み舟に積んだる荷物を、こまかに申せば、下荷に積んだが渡世はやりの五両札両札式歩の札から歩札に十銭。大札大札をお山の如くにツサリコと積んでナ舟の船頭はえびすに大黒比砂門、弁天、ほていにほくろく、じゆうろうじん とナ 七福神がナ みなみなそろえて飲めや大黒歌えやえびすよ、今年の年はな豊年どしだよ、浜が大漁で岡萬作だナ 永き世のなとうのめむいしみな目がさめても波のる舟のナ音のいきかな 高砂み舟に積んだる荷物を、このやえ納めるオヤおめでたい。

三 ヤレソーダヨ あらたまの年の始めに門には門松、れいしやにや年玉
正月お祝うちにはおかざり、大神宮様にわ、そなえをかざりて

えびにほんだわら 先祖代々 ゆずり葉なんぞをかざられましてナ
お子様衆はナ まりをつくやら、羽根をつくやら、お若衆はナ御酒を

あがるにや 金の さはちで鯛や鮪をどさりこと積んでナ、飲めや さわげや、うたえや、おどれとおいさめなさと、門なる松のナ一の小枝にぜね花なんぞが咲きそろいますよ 二の又小枝に小判がなりそめ、三の又小枝に小枝にくぢやくの鳥がナ、羽根を又やすめて羽がいにてわなせねでくみする口にわ黄金をふくみし
そうやナこのや鳥がナ二度と再びとまりにならばナこの又お家は、末代長者でいよ暮すだろ。

お軽 勘平 恋の道行

チヨボ 主家の大事に思案投げ首お軽をつれた早野勘平舞台中央にて行きつ戻りつ
チヨボ かかる所へ上野師直家来鷲坂判内家来引つれて
舞台花道ヨリ判内登上
忠臣蔵三段目「お軽・勘平」

配役

早野勘平……龍崎敏次

お軽……

鷲坂判内……池永幸吉

家来……進藤増二

判内・ヤアレ来い 家来へいへい

ヤアレ来い 家来へいへい

コリヤコリヤ家来共もしも勘平が居

たならば

だまつてばつさり(ダマツテパツサ

リ) おつとそれでわいけくない

ただばつさり(タダバツサリ)

出来た出来た身につづいてこうまい

れ(ネエー)

チヨボ 一足歩んで立ちとまり

判内 待て(ネエー) 待て(ネエー)

待て待て待て待てくれよ家来ども

三味線・半乗り チチンチチンチチンチエ

チケチケチケチケチエンガチエチン

判内 もしも勘平が居たなれば……

黙……出来た出来た身に續い

てこうまあいれ

チヨボ 二足歩んで立ちとまり

判内 待て(ネエー) 待て(ネエー)

待て待て待て待てくれよ家来ども

三味線・半乗 チチンチチンチチンチエ

チケチケチケチケチケチケチケチンチ

ンチチンガチエン

家来 若うし若うし旦那様ネエー急げ

急げとおつしやれど(ネエー) 行き

つ戻りつしてわ道はさつぱりは

かどらぬネエ

これから我等が先に立ちおいさめ申

すが合点か

判内 ネエーかしこまつてございます

家来 かしこまつたら立つて急げ急げ

判内 こうりや家来ども主に向つて急げ急

げとは大胆大胆……

家来ども勘平居た居た居たら一番乗

らざあなるまい

早野勘平

三味線・本乗り ヨイテンヨイテンヨイテン

テンテンテン スツケケケンテンテン

テンテンテンテンテンテンケンガテンデ

ンステンガテン

判内 うぬが主人のエンヤワンワンおつと

違った遠谷判官高定とおらが旦那の諸

直様とが何か殿中の大廣間の最中で

ベツチヤクチヤ(ツンツルツン) ベツ

チヤクチヤ(ツンツルツン) ベツチヤ

クチヤと話をすると思つたら(ネエー)

腰に差したる少いさ刀をチヨイとぬい

てチヨイと切つておいてつておいてつ

ておいたちこつこ廿八日の咎によつて

邸は閉門網乗物にてエツサツサヤツ

サツサアアガラガラピツシヤリコと

ぶつけてしまった

三味線・半乗 チチンチチンチチンチエ

チエンチエチエンチエチエンとチチエ

ガチエンチエン

判内 サアサアこれからうぬの番(ネエー)

おれの惚れたお軽を連れて逃げる

わうまいぞ(足) うまいぞ(足) う

まいぞうまいぞそつちがうまけりや

こつちがまずい、よくも最前京の

三十三間堂には佛の数が三万三千三百

三十三体あるかいなこんかいなどたま

して連れて逃げおつた(ネエー) 俺の

惚れたお軽をこつちへよこせばよいい

やだなんぞとジョクネルとうぬのピン

の毛一本一本……二本二本……

7/24 7:27 OK

お松 四郎三郎

嘉山久造

笠松峠

(一)

笠松峠 一

津輕の御城下によ (頭)

マシツタヨ 国は三水よりはるかはなれて北
 にとあたりて津輕と南部の其の国境に音
 に三三三三 笠松山とて峠が三三三三 其のや峠
 に五年三の方々山賊 鬼神のお松が住みかま
 致すよ それとは知らずに出羽の守様御
 家中にてはな 夏目名のりし 四郎三郎はな
 殿の御用で御用金びやくに金子三三三三首
 打かけてな 花の東之ふくさりなるよ 運の悪
 さにかゝる峠が笠松山よ 山のふもとに福島
 町とて、打たぬるよ 少はなれてお助け茶
 屋とて名代の水茶屋 三げん三三三三 茶屋
 の其の名五細かに申せば 雞屋に亀屋に若松屋
 とてな 中な亀屋に將打ちかけてな そこで侍

侍 ちと御免下さ水 茶屋の亭主
 侍 これはいくようこそ おいで 御入来 ぞははしじ
 かいまますニ水之

侍 亭主ゆるせよ あいや亭主 今日の日
 こくげんわ何時とありなるや

侍 ははあ私しかとは存じませぬが 今日の日
 いせいのかまむく所を見まわすれば

停 最早八つ半 あり七つ頃にもなりましたようか
 ある様にはあの笠松山を御存じ有てお登
 りか 又は御存じなくお登りかわ知らねども
 あの笠松山に上りましてわ 五年この方丈山賦
 鬼神のお松が住みかを致し 若き者には悪路
 互に掛り まあその年よりしげつてーと見受け
 るならば 諸に任掛り 切り取りごうとうは
 どう賊の働さやう ありうの谷合には 首か
 一つ 又三つうの谷合には 生首が一つ やや
 をそらしゆや 二つと云つて 日七から朝の
 四つ迄は 更に一人の人も通りもござりません
 見まわすれば 貴男様には 御大切なる御
 身命 二より一夜は泊りて 明朝お立ち遊ば
 されましては いか様が ござりませよう

侍 ありや 停主云うてくれるは 親切かまじけなうが
 一石取つても 侍ささ之も 後えは引かぬ
 其の事さすくんば 二のふもとの 茶屋に泊り
 もせうが 其の事さして 泊れば 敷のいけい
 我が身のちがよく 差した大い竹光同様
 にあそり 歸りの切に 世詣に成らう共 あの笠松
 山迄 さしかからなくわ なるんとしてよう

停 下しも ござりましたようが 二人有ります 事ならは
 侍 歸りの切に (侍 停主 両者で) かたわて お自分から
 歌
 そにて 侍 茶屋を立ちて 笠松山へと おや 登られるよ
 万作 三郎 本現する
 ヤシ 三郎 急げば 程なく 笠松山と 笠松山 かな 笠
 リが 三里で ぐさリが 三里で 三里と 合せて 六里の 峠と
 一里 / 名所を ゆくせき そては 二里と づれば 小
 づれば 熊も 驚く 不動の 滝と 二里と づれば 小
 松原にて 十二ヶ 葉師と 三里 頂上は 爪も 通さぬ
 ちくまん ぞきの な びょうぶが 若やに
 鬼神のお松 歸りて 本現
 鬼神のお松は 女なれども 七十と 余人の 手下を 侍
 ちて 七つが かりに 七名の ぼさまに 鞭打ち かけて なる
 なるか 向うまを ぐめて 見れば 侍 姿が かくかに 見え
 えるよ あのや 侍 旅の つかぬ 足の ふみ様と 腰の
 重さ 五金に つもれば 三日 兩余りの 仕事と 見え
 るよ あいつ ぞまして あの金 取らうと 吾身が なが
 らも 喜びますよ それと 知らずに 夏 夏 目 名
 のりし 四郎 三郎 は なるぞく 近よる そにて お松
 は とも あわれなる な ほそき 声出し 申しくと
 ぶは わり ければ なる そにて 侍

歌 おや急がれるま

マレンカ多急昨日程なくおとなせ川をよ川の中らに
て鬼神のお私わ 二すまを取りにて ほうりく

侍 ありやおなこ これ迄は何なくとくごりきて
何が悲うて ほうりく と涙をこぼす

松 お侍様取を云わねば理が知れぬ病は水でんかんで
ごります

侍 ははおおなこ水でんかん 水でんかんとは水に付いて
はさぞ良くなりて有ろうとあさこ水にておふさ水よ

松 おふさこにはおふさこが おおごごごう者は
月七日のふさうが有り貴男様のお差し
遊ばさ来る大小のるにあそ水 もつさいしごく

侍 おおごく るしゆうなりによつて おふさ水よ
しかうば御免くそされまし おおごごごうえ

歌 ぞごご侍おなごもおふりて川の中にお入りな
るよ後瀬のかそまは深瀬といつわり深瀬かかそ

まは後瀬といつわり川の中程お入りなると
鬼神のお私わおな侍前 持病のしやくとて

うしろえふんぞりかい中よりもなれ寸五よき
はごう取をたして侍むねはすんがごごごせ

はごう取をたして侍むねはすんがごごごせ

侍

口はしゆうやな残念やな 女位とあなどつて馬鹿な
まねに應じそわい金の鬼神お松とミミろえて
しんげん勝負しそなうはまごらこうはこえれは
すまものま愛はばんじやくにつのれども

侍 りんごもいかな わなひ

歌 ぞごごいがわ流れて流れる鬼神のお私わ川の
ふちにてしがいとみきよせ 着類衣服や金子
をうばりて 大小取りて ぞごごお私わ

松 大壘成就うまかりなし 久しかぶりの或百両
ニールや侍良くさきや水入金が仇のせの中て

金があるやこそ命が元る 金がなげれば
そなごの命も助かるて有ろううぬれ宗匠

は日蓮宗かしくん宗かわ知らね両方
合せて南妙法蓮日佛となえ置きさあさ

これより川下え流れ行さそんびかうすりのじ
きに成る共ごくうくいなりとごくいなりと

勝負次第にまあ あしやあがれ人目
かかつて大軍人目にかからぬ其の内は若や

を差してあつとも早く おおぞうじや

を差してあつとも早く おおぞうじや

ヤアーレマテヤイ。お私(持)と云うはそれの事か。
 おおあたり人が居なけりやうぬ水(事)ぞそいらあちり
 の物陰(で)しろく。様子(ま)うかがえは良(く)もく。我が主(の)
 四郡(多)都(ま)あのおと(な)せ川(に)て(ま)よし(打)ち(打)つ(ま)ひ
 おの水(主)の仇(じ)く(じ)よう(に)な(わ)にか(れ)ば(よ)し。い(ぞ)何(ぞ)
 と(じ)く(わ)ると(う)ぬ(う)わ(あ)こ(つ)か(ま)え(ち)や(ま)ゆ
 し(ま)あ(こ)か(つ)か(ま)え(ち)や(ま)ゆ。さ(ゆ)つ(く)／＼と(云)う
 い(ど)い(目)に(合)せ(か)ま(び)ら(野)の(ま)う(し)。て(ん)じ(く)も(め)ん
 は(う)ぬ(に)ま(く)に(て)ま(わ)い(や)つ。も(う)こ(う)な(つ)て(わ)か(な
 わ)ん(佛)の(わ)ん。親(わ)ん。け(い)わ(ん)。わ(に)の(わ)ん
 せ(ん)し(ゆ)う(の)食(う)の(は)と(う)わ(ん)で。う(ぬ)ら(の)食(う)
 の(は)は(け)わ(ん)。か(け)わ(ん)。ぬ(ま)ん(だ)わ(ん)。お(い)ら(が)
 食(う)の(は)金(の)わ(ん)銀(の)わ(ん)。さ(あ)さ(ち)私(の)返(答)
 は(わ)んと(わ)あ(ー)ん(と)う
 ナ(ホ) わ(ん)と(ー)と(つ)め(か)け(そ)り
 お(私) お(の)水(し)や(く)な(大(立(廻(一)))
 〃〃 化(して)火(に)入(る)夏(の)虫(い)ぢ(な)き(事)で
 の(ま)と(つ)そ(山(岩)ま(ま)して(あ)つ(と)も(早(く
 お(、)そ(う)じ(や
 歌
 そ(で)お(私)わ(元)の(岩)ま(ま)え(お)や(急)が(れる)よ

笠松峠(一)
 伴仙太

歌 四郎三郎のな其の又一人国の千太郎のまぐらもと
二と現れければな ぞにて千太郎は

千 日はあ合美が行かぬしむむり其の内合二
に父四郎三郎が正ありと現れては二
不是後やなあり

十景 ぞにて千太郎は どうこと つつさるあそりを見まわ
千 見れば父の片袖 次は何が言ひをる物がある

十景 ぞれをまに取う用ひて見れば
十一 此の度 父四郎三郎は 御殿の急用に行き
空松峠の其の下り音無川にて婦人の身に合ひ
ぞまし打ち合ひ何事か 父四郎三郎は無念で
有ろう わがつづらんをほらしくれしとや
おのれ仇打ちすぞおくべきか どの御殿をさして

千 殿 ぞにて千太郎は 御殿をさしてぞ おやまのれるも
千 頼もろ

取 どうれ 三れわく どのを常かと思ひます水は四郎
三郎の件 千太郎様 何用あつておこしなされま
千 御殿様にお目通り 三つまつりまへ上りましそのてこ
べいなま

取 暫くお待り下さいませ
御殿様に申上げます千太郎三郎の件千太郎様 御殿
にお目通り 三つまつりまへ上りましそのてこの儀
かが取り口がらひませうや

決千ス 其の二

殿 苦るじゆのうばいよつて 千三 三れ之

取 千太郎様 三れにてお通り下されませ

十景 御殿様は 一向の方よりいにてける

殿 こうりや 千太郎 頼ひの儀とは 何事ぞと

千 日はあ 一此の度 父四郎三郎は 東之下る道すがる無念
やなあ 空松峠の其の下り音無川にて婦人の身に合
かりぞまし打ち合ひ何事か 父四郎三郎は無念で
あろう 仇打ちのお頼ひに上がったのていなき

殿 こうりや 千太郎 仇打ちの頼ひとなして 其のしやうこうわ

一此の度 父四郎三郎は 我が急用に行き 東之下る道す
がら 空松峠の其の下り音無川にて婦人の身に合ひ
ぞまし打ち合ひ何事か 父四郎三郎は無念であらう
ころりや 千太郎 其の方合を 若輩なれば 此の方より 助
太刀を つかわすに なつて 有難く心得えらる

千 御殿様には 有難く 御言葉 私どもも 四郎三郎の件
助太刀の儀は かくおこわり 致します

殿 こうりや 千太郎 主のおめせを そとにあるか
千太郎様 三つまつりまへ上りましそのてこの儀
千太郎様 三つまつりまへ上りましそのてこの儀

千 日はあ 三景 御殿様は 一向の方より 入りける
千太郎は 刀を おしりませませ

FIXED 08-11-11

千 我の家をさあしして

歌 ぞにて千は日 我の家をさしてぞや ちや後のれるも

ちや後のれるも 家をかえて旅しようぞくまな 下から上
まで 細おに申せ日 かりゆらのわらじに細のこころけ
こもりのちや日ん ありちありめん ちよむながじはんと
合が三三のししが しまはちじまのまよ ちわぎにカ合し三か
黒のぶつささ 四つ目のしちるもん のみわ本立小首同く
ゆいてる 母や妹に水さかすとして 殿にもらひし大り
さしてな

我が家をかえてな いて行くのちよもあわれなるも
後には程なく 釜松山とて 山のふもとに播磨町とて
小村がなるも 少しはなれてお助け茶やとて名火の水
茶や多野になるも 茶やの其の名を三まかに申せば鶴や
は亀やに若松やとてな 中な亀やに藤打をかきてな
そよて千はわ

千 ちよとめ人くたされ茶やの停主

これはいく お侍様さうこそやおいで 活入来 こそわ
はし近の ちやあつちの二れへ

千 亭主のちよせや あちや停主合の日の期限は何時と相成るや

亭 日はあ私のかと日存じませぬが 今日の日ゆせ かのかな
ちくちくを見よわすれ日 最早入の 半あひての 雲にもし
なりまじようが 貴男様ははとれからとれえの ちや停主
かわ知らぬども あのを釜松山とてちよんじあつてお客のちま
あつた ちよんじあつて お客のちま ちよんじあつて お客のちま
に於ておしして日五年のちよ女山賊 鬼神お私が在るか
見殺し若き者には ちよんじあつて 又ちよんじあつて ちよんじあつて
見殺し若き者には ちよんじあつて 又ちよんじあつて ちよんじあつて

亭 働きたやう三年以前其の春に 年の頃なら四十を過ぎ
旅しようぞくの ちよんじあつて お侍様が 花の東へお下りて
△ちよんじあつて お客のちま ちよんじあつて 見よわすれは 貴男の
権には 活大切なる ちよんじあつて 二まの一夜はお客のちま
お客のちま ちよんじあつて ちよんじあつて ちよんじあつて

千 あちや亭主其の ちよんじあつて 人ば此のちよんじあつて 茶やに ちよんじあつて
せよんじあつて 其の ちよんじあつて ちよんじあつて ちよんじあつて ちよんじあつて
うとも あのを釜松山とて 登りつめお客のちま ちよんじあつて ちよんじあつて

千 それではしはし 道 活案内 致しよしやう

千 ならは亭主 ちよんじあつて ちよんじあつて

亭 しからは 活免下 ちよんじあつて

歌 ぞにて千は 亭主の ちよんじあつて 釜松山へと (歌とちよんじあつて)

亭 あのお侍様は 年の頃なら十五六 お客のちま ちよんじあつて ちよんじあつて

千 亭主何と申す

亭 へ何と申しは 致しませぬ 結構なお天気様で ちよんじあつて

歌 あちやえ

亭 あのお侍様は あのを釜松山とて 登りつめ 鬼神お客のちま ちよんじあつて

千 亭主何と申す

亭 へ何と申しは 致しませぬ 結構なお天気様で ちよんじあつて

歌 ありあけれるよ

千 亭主ニニこらで お別水に 致しましやう

亭 てもニニこらまじやうの合しはらう 浅菜内 致しましやう

千 亭主ニニこらで お別水に 致しましやう

亭 せんらうの侍様お別水に 致しましやう お侍様おさらば
てニニこらにます

千 亭主ニニこらに 亭主(お侍様おさらば)に
亭主ニニこらに

千 亭主ニニこらに 亭主(お侍様おさらば)に
亭主ニニこらに

歌 急がは程なくを松山たの 急松山はな 登りが三里で下りが三里
でいも三里合せて三里の峠をいり

千 昔二百里ががし若石にまよひし 十二ヶ葉師で大願た
んで二里半のがれは人も通らぬ おおかみみまをよ

千 里頂上は川も通らぬ ちくまのなな びまうが若や
鬼神のおねわなをならも七ヶと余人の 傘下をまよ

千 七ヶががりの山若の由まの女私に 腰打ちあけては
はるか向うをなめて見れば 侍安ががすかに見え
るよ ああや侍 年の頃なら十五か六をさ 色でせか
らか 遠路でまよしよか 持痛のしやくとまよして
らうと我が身ながらしよるにまよる

千 水とも知らずは伏なりし千太郎にぞはな さん
近ある 亭主でおねは さまあわれな百五言を
申し

千 最前よりせむし 亭主(お侍様おさらば)に
まじやうの者なげしやうの者の せむしに
体 ありあせらるよ

おね 全く左様の者ではニニこらにせぬ

千 女子はかるまい せむしに せむしに
せむしに 親の仇が合知れぬ 我本名を名りて
せむしに 我本名は夏目自彈正四郎三郎の傳
千太郎は我のこ 三ヶ葉茶前 其の春に
我父四郎三郎もあ 音無の せむし
打るに 打るに おのれ親の仇 舞帯に せむし
勝負

おね ほん 飛んで火に入る夏の虫 一口が南
てあされるこのちやくん侍 仇はありかまはら
いさい 我本名は名りて せむしに 我本名
はまつたなくも せむしに せむしに
縁 家来 足立三郎の 鬼神のおねとわ
我のこ せむしに 父四郎三郎の せむしに
道すれども せむしに せむしに

千 之 せむしに せむしに せむしに

能く計 おおきく あそびに人が居なけりやうぬれりことさ
 おいら連 鬼神松の手下にて七十と余人の
 真の中老やの頭 熊太郎とは我がことらぬ
 れも父四郎多助のめいどの旅り道すれども
 まあしやあがれ
 千太 ことと所て手回取つそ 遠くは行くも 後におつりて
 子分やあれまてやい
 (まてとはそれがれのこまか
 子分のおおきく あそびに人が居なけりやうぬれりことさ俺
 違ちや 鬼神 おお松の手下にて おおかみ三造
 とは我がこと 俺連も鬼神 おお松の手下にて
 なべうそ 取つその助とは我がこと かねれも父四郎
 三郎がめいどの旅り道すれども
 ヤア 千太郎 女は父四郎三郎ハゴレニアリヤ
 其の声にお松は驚き木の根につまみ
 千太郎 日つて三毛な
 此の首 御殿様の 御年産に くら御殿
 さいして (三毛かうせんす踊り)
 歌 ぞいで千太わ 御殿ささしてぞ 玉や巻が
 れるよ
 千太 冥土にまします父上よ 此に不御無念はらされよ

764千太郎

高台寺の和尚の 茶屋場

高台寺、和尚、茶屋場

頭エーニマーアアニーアアコーリヤ

ハハイヤアアウーハハアアアアア

ールウウフフニニーソコダヨ

アアウハハアアアウウホホウオウホホ

アアウホホウオホホホオオ

アアウハハアアアハハアアア

アアウハハアアアアアアアアア

茶屋場 二

アアウハハアアアアアアアアア

茶屋場 五

初尚 マタラウカラデモ ツツラツツウツト ツニ又ケテ
 キリウナ アネサシダガ 其、飯高申村ノタニ
 ジヨウノ ニヨイト云ウ ゴシラ ゴツトシタマ
 イキラコデモコノ初尚、事ツ定テニテモ
 ブラサカツテデモイルノカイ
 お市 其、シウコトワ
 初尚 ソリヤ マルマイ
 お市 頭三ノ第一アサキノミダレスギンガお持前
 初尚 イヤカイブンノワルイコトバツカリ
 お市 櫻ニワ赤イイニロウ オサヤ
 初尚 オオサ 櫻ニワ赤イイニロウ オサヤ
 お市 オチノ、お前ワ横カラ見テモ
 初尚 サテノ、ソシワ タテカラ見テモウ
 敬 トウーオオ ヤアラードウーテクソウ
 ナーア 初尚 オオコシワ ヤアールシサ
 マダナア コシシワ ナアハアアライヨウ
 初尚 マシセノ、アア大妻タ大妻ダ(何が大妻タ)
 又アマシタノ(何が又アタシタ) 櫻ガ又アマシタ
 (櫻ガ又アチワ大妻タ) ヤレノ、大キナシシモ
 居シハ居ルモノ、今ココエナセナルメメ美シイ
 アネサシダデテチチ 初尚サシトオカケナサイ

茶屋場 六

初尚 イヤ馬鹿ナマネオスルサト云ツテ居ル
 ウナニア、ジシニドドクツツバニツチシマツ
 初尚 ワタイカイコウダト申シタ アイツ何
 デタタモシテナシ ココイラ近辺ノ山ノ中ニ住
 ムキツネカタ又キニソウイナシ アイツ誠ノ
 ナテラ今一度ココエ引イダシ アマタゴケン
 ブツノ其ノ申デ ナヨツバタケテ ナヨツコシテ
 ヤロツノ、 オオソウシヤテ ソウシヤテ
 今ノ中初尚ワ馬鹿ノ、シイカラカエル
 ソエカエルソエ
 お市 アイノ初尚今ノワ、お市オサシスワイナ
 初尚 ヤーレンモシガお市カイソモシガ、お市ナラ
 コ、初尚ノオ房モ、大妻房ナヤソエ
 お市 私ガお前ノオ房ナラ
 初尚 ソラニお前良カロウ
 お市 サイノカワラワノガレワスマイ
 初尚 サイノカワラワ、キライノテニシヨウ
 ソシト二人チンウカラエヤタトエ火ノ中水ノソ
 コマアールヨ
 お市 コツナモクサケテ コマールヨ、ゲンカニガエ
 ワイトワネド コナイダシナタニヤツタル
 アノヨローイ 踊ニ入ル
 銀ノヒラノ、カニガシ、お市ニヤルトテ落カ又
 此世ニカノコウカノ、アワシマ様

茶屋場 七

踊歌

ナヨイト ナヨイト ナヨイトノ
カニ
デモカヤマシヨカ
相尚ス ナアお市イ...

ソリヤアアア一見ロウ...
お市ヨリソリヤアア一
カアアアハリー カアルナ
ナアハア ウーハア アアヨウ...

完リ

スニ

細

田

細田(一)

一ツ誠石が松原カ左が溪路カ溪ノ子鳥

カ山ノ中ノウサギノ様トニテテタ十ヨ七
ハルカ向ウニ白浪ラツカアレコソ誠ノ細
田ノ小川エワチヤエネエノ真中ダ

ハハイヤヤタドツコイ コシホホ ウホホンカア
ーワア...ノ...オ...ヨウ...オオイエー

奴ハア世間ノウワサ諸ノ園ヤハコノカイトツオ
十七八ナルメメ美ミイアネサシガ豊年方

依ノイテカシオ持ツ通ルトノ諸其ノイナ
カエコ、奴ガウバイ取リココウキ様エ

持出ヤバホウビノ金ワ望ミ次第トラ
其アネサシニ一度又イタイモラダ

アレカレコレスルウチヒガガ見エル
橋ノタモトデ忍ニテ様子オオオソール

女ソレ誠ヨココガ細田ヲ細田ノ丸不橋シ

ヤ渡ルナカイヨモトウセハマリノ横タテ
シマノサ前掛ケニキキヨウジマノシモツヤ

ヤシタマ、デ又アイオ、十ヨイトマダオカマリ
ヨシテ爾ノワラヌノニ蛇自ノカラカサオ

オヨイトマダ、サミカケダ

細田(二)

奴ドドドツコイアネサシ見マワスレバ若イ女中

ノ一人旅オマエサシワドレカラドレエノ御通
行ナカレマスカヨアネサシ

女コレ申シ奴サシ私ガイシウワシモツヤ早都宮

サイノ者コノタヒ桃子ノカニシ様エ参イイニ
マイル者道エ行キマヨイ時ニ奴サシコノ橋ノ
名ヲ何ト云ウ橋デゴサシスカイナ

奴ハアアネサシコノ橋ノ事カイ此橋ヲ細田ニ
於テモ名モ高シエツハンマラノマデデ

ワナカツダ丸木ノ一本橋ト云ツテコワーイ
橋此橋ノ下ニワ大キテ蛇オスミワースト

オオツトネエサシ驚クマイソレワースト以
前ノコト今ワ今トテ大キテ亀ガ住ミ

其ノ亀オカサシノイカサワイカイトモ
コノ奴ノ背ユビノミダカイセイカシテコレニ

マママワリカネル様十亀ガ住ミ其ノ亀サシ
ゾワコ、奴ガ通ツテモ何トモシナイガ

オマエサシノ様アメメ美ミイアネサシガ
通ルトウラソデオヒキツマオヒギスス

ラズーソト引キ込ニテシマウコヨツテカサラ
ズコノヘンワユダンナカレマスアヨアネサシ

22 細田(三)

ナコシ申シ奴ガシ其様ニトコトコワイ橋ヲラバ
アアトオオホヒキテ オ通セ下サレ事ナラバ
ホニ私アリガトウ ゴザニスワイナ

奴ハアコイツワヨツポドヨリモ シヨセキネモ シロ
モトヲコノ奴ガノミコシタル 世事 タイタイ
カイシヨリガ此ノ橋ヲ渡ルニワ 第一下駄オ
又申 足袋オスギ カタカガオスボノ

オツレテ算シウゴザニスカイナ

奴 ソレデ吾野ノ山様 此ノ奴ガ先ニ

オツカラソモサワアトカラヤカコラ コーリヤ

歌 シカカソロノ オチズニツタリナセ

ハハイヤチタドツコイ ワニハハウハシター

ールウ トウー オオモ

カマンワアー オヨウ... エー

奴ドト ドツコイアネガシ此ノ橋モ シユビヨウ後

リオオガシモ オメデトウ コノ奴モオスデ

トウ オマエガシワコレヨリ 桃子ヤリト鹿

島ナリト 勝手次第ニナカレマシヨアネガシ

23 細田(四)

ナ奴ガシ急デノ道アリガトウ ゴザイマシタ
奴ガシガバ アネガシガバ

ナ今ノ奴ガシオオヒキテ此ノ橋モシユビヨウ
渡リドク桃子ニテモ急ニヨカカ

ナ言ハルカ向ケ白キモガ見エシ アレガ何
ゾゴフテモノデ イケリヤヨイ

歌 ヨイハルカ向ケカラ カガエシヨウトノシノタケ
コゲラノミタドウノ初尚カニカ雨フリアケ

クニ修業ト出掛ケテ修業ワヨレドモ

クワイコロモニシテシヨウノバガオカケ

コチヤ オヤハシオモウカデシタテテ

右ノ手ニシユスオモテ左ノカタニワ大平ナ

木魚ヲ横タニナヨイトカカエテナ

オ経ノ文也オ何ダト尚ガバ

オ経ノ文也オ何ダト尚ガバ

細田(七)

女 オヤシ 和尚サンタベルモイデワゴサイマセン
ソシエラ和尚サンウラナイデモゴソンジデスカ

和尚

ナエウラオエ ソソナガウタネエキヤ コソナワ
カフオエブンノコトダ

女 ソソナワ 和尚サン ハツバイデモ

和尚

ナニハツバイ オマエハハツバイノト コノ和尚
アソタケエト グルノソトシマルメタ
エマヌクイ ホウテンボウチモサシマゲマシラカ

女 オヤシ 和尚モスオマセヌ ソソナワ 和尚

和尚

ナニオガクダノデシガクダノトムズカシイコト
オエウ 女タナア ソレワソウト オネエサシ
年ハイタツダヤ

女 ハズカレナガラ ニイハオ

和尚

何ニテハ ニイハオニラハデ島田 コイツワワラ
ナモニデヤネエ アツナイイヤ
ネエサシニイハデワアルマイ本當ノ舞オオシネ

細田(八)

女 ハズカレナガラ ナセオ
何ニセトナセオヤアコノ和尚ノコト

和尚

ナレネエイイシメゴロウタナア
ドラノ見アアゲマシラナムナセ大明神
鉄砲コラ 春日ノ橋大ボサツ

女 ソソナワ 和尚 コソナワ 和尚 今日ア三日
白デ ナニノ皮ヤラムイタ

和尚

女 オヤシ 和尚サンタベルモイデワゴサイマセン
ソシエラ和尚サンウラナイデモゴソンジデスカ

和尚

ハハアオエシ コソツバガコウトシガニョツチコ
ワカオマシタ 何デオマエサシワ 鉄子ウシマエ行
クニエワ相州小田原頼朝オコエテ 伴勢大
楠宮ノオエト オイデナカレマシ

女 オヤシ 和尚サンタベルモイデワゴサイマセン
ソシエラ和尚サンウラナイデモゴソンジデスカ

和尚

何ニテナラハ 何ニテナラハ 何ニテナラハ
ハズレタノト トラボウニムズカシイ事オ
云ウ女タナア

ソソナワ 和尚 大勢前ハモシナラハ
トイツアアツタリ ハズレタリ

(2)

マアハズル方 ガクブクリン ドラク / オエサン
見テアケマシヨリ

チヨイトテマシタアホサダ コレガ何ヨト オマエネ
マシタムトナレバ アホサダマ クル / バツナヤ
ヨイヤサ シニマルメタハカゲサ オダモシラニ
ナガイワゴサラス ヤーヤツクシテ甲シマシ
ウナラ 高イゲサ峠 ビクイカガツケ 山頂
オ山ニヤ フデスヤゲ又ヤ 殿様ヨサニヤ 鳥ニワ
ノリカヤ ソバニワブツカヤ 豆膏ニアニカヤ
シヤメシヤ茶スヤテ カラク / 木ガリ オラカト
ナリノソマサトナリ ハラヤノカスヤ イセキガ
オホヤデ 普賢カスホヤ オマシカ 鴨又ヤ ハアサ
ガハヌヤ コメコガカワラヤ タツター一匹ノネコマテ
ミヤサビイ / ノ子ワトニビ子 カマノ
ノ子ワカラス子 エツハニマルモウケノゴサトナリ

女 オヤク / 和尙サントウワカリマシタ

和尙
何デオマエサリ 鉄子カシマエマイルニワ 江戸本所
二所方 一里行ッテワ 二里カエリ 二里行ッテ
ワニヨイ / イトカエリ 十日モ 二十日モ 行ッテ
リチカリシチ イトソウスルト向ウカラ 旅人ガ
クルカラ テウ其ノ時ヲオ前サシテ女ガカラ

(2) 細田(十)

コスマオトリコシ甲シ旅ノ子 鉄子カシマエマイ
ルニワトウマイリ マスカトキバ知レルウラヤ
ダワイナ
女 オヤク / 和尙サシ急ギ道ニ アリガト
ウゴガイマシタ

和尙
オーットオエサン コノ和尙ハアサニチヨハニ
アケクハチニオガク 殿方迄 ヤラシテ
何ノ礼モナクトワ 何トフビニツツル女
デワナイカ

女 ソニナラ オアシテモ アゲマシヨカ
和尙
何カサ カサワ去年ノ三月カラクル /
坊主サ モウコソク / タワイナ

和尙
何オマン 足ワ色コソクロイガ アツモカタンホ
コツニモモカタン方 御用と オツシヤレバ
中ノ小足オ差とゲマシヨツカ
女 オヤク / 和尙サン スキマセ又

21

細田 (十一)

和尙 コロク / 不エオシ オマエヌコウガユリ
コイカマサヨチコトカアル 仏の向ウニ マツモリ
カ夏スル

ナ アーマンモリデ 何トモコウ
和尙

ソモジトコ 和尙トタシモ見ヌウナヒトタビ
忍ハバ ヤカコリヤ コーリヤ

歌

ニヤイト 忍ハバ コララク ジョウドノ 表御門
オチカリト 謝スバ ナゲネエニ 眞中ダ
ト云モバ アネサシガ 腹立チガオシデ
コレ 和尙 和尙ガシエ 其ノ様ナルヲ
カサエシヨクドノ シノクヤ コゲラノ ミタ
ドウガ タチヌスマイ

ナ オヤノ / 和尙ガシドウナカイマシタ
和尙

ドウナカイマシタモナイモシタ コノシナゴメン
コノ和尙ガ カカシシヨクドデ モラシテキタ
ムサ マワオミンナコホシデシマツデ オオ
モツオエ オオモツオエ コノシナゴメン
アツナミタドウガ ナンダツツモ 夕夕ナクモ
ドウデモ ヨイワイナ

22

細田 (十二)

和尙 コノ和尙 / テウカガ 朝カラ 晩マデ
ノツカラ 木ノ様ニ 立ツカラシ見リ
歌

ニヤネノ / ナゲネエニ 眞中ダヨ
イヤキタドウツコイ
ミタドウガ タツマイエ

日蓮経 頭

| | | |
|-----|----------|----------------|
| 父とよ | 母との菩提所わ | 同じく小菴蓮花寺 |
| 御父 | 様の其の御名わ | 坂名の 治郎重忠と |
| 御母 | 様の其の御名わ | 佐竹が 山の御娘 |
| 梅菊 | 御前と申すなり | 御父 様の初夢に |
| 国威 | 菩提の有難や | そもく 宿らる腹の至 |
| 二月 | 三月は腹の水 | 五月 六月と相成れば |
| 袖や | 袂でわかくされぬ | 七月 八月と白を送り |
| 九月 | 月もなごなご | 最早 十月の産み月也 |
| 安房 | 上總の国境 | 一ヶよ 坂のな岩光山 |
| 天から | 五色が舞下がり | 御産の ひもがなとよは水 |
| 玉のよ | 様なる御君が | さあ水が 誠の日蓮様 |
| かよ | お仙もお方も | ぢい様も はあ様も 十七島田 |
| も皆 | 来て拜めよ | とかく浮世は 明け経てなけ |
| 水は | 願ひ事なき | かなわね |
| ナンテ | ナンナムウフウ | イヤキタムフミヤ |
| ホウ | オンホホヤシ | |
| オンホ | ホーオオ | レーンコリヤレーン |
| レニ | エヘウヘ | エヘニタラコシダエヘン |
| ノエ | エヘウヘ | エヘンヘーエヘマダ |
| エヘン | エヘウヘ | エヘン |
| キョウ | ーオオ | オーエー |

(此のゆすりわ後の歌には各します)

日蓮経 一

| | | | | |
|-----|------|-----|---------|----------------|
| アー | ンレワ | ナンテ | ナンナムウフウ | イヤキタムフミ |
| ミョウ | ホウ | オンホ | ホヤシ | (以下頭のものゆすりと同じ) |
| 一 | さああり | ガマ | ヤの佛人わ | 光まよう |
| 照 | らすよ | せの中 | 一教を | 広める 宗門の |
| 高 | 祖よ | 日蓮 | 大菩薩 | さあどつこい又拜 |
| め | よ | ナンテ | ナンナムウフウ | (ゆすり皆同じ) |
| 二 | さあせ | じよう | とよ | さいどの其の爲に |
| 諸 | 人を | 助け | んと | 此の世に |
| 御 | 誕生 | トコ | トン | ばされし御ゆりの |
| く | わしく | よ | 尋ね | な奉つる |
| 拜 | めよ | ナンテ | ナンナムウフウ | (以下ゆすり) |
| 三 | さあ頃 | わ | と | 天後の |
| 八 | 十と | 五 | 代目 | に |
| れ | ば | く | んに | い |
| 安 | 房の | な | え | くに |
| か | く | 水 | なし | |
| ナ | ホ | 身 | の | 置 |
| ひ | と | す | じ | 道 |
| 落 | と | 差 | し | 大 |
| | | | | 野 |
| | | | | 孔 |
| | | | | 大 |
| | | | | 夫 |
| | | | | の |
| | | | | せ |
| | | | | が |
| | | | | 水 |
| | | | | 定 |
| | | | | 九 |
| | | | | 郎 |

日蓮経二

定 おーい、おーい、おーい、おやじ殿、思わず
 知らずにわが雨、夏の夕立と云ふものわらふると
 日相に成るが一時、急がずばぬれまじもの
 旅人の後よりほるる野路の打雨、太田道不
 ん、ウツエエワツハハア、ても良く読んだるあ
 そ水わそうと此の後の村方で合合を老人
 おつかけ、こゝに之くるであらうや、おつかけに忍
 んで、^{様子}をそそ、そうちや
 ナホ、おちりり、にけり
 子、なみ、まよう、ほう、れん、げ、ま、よう、
 定、父、あ、ん、持、つ、ま、最、之、前、より、お、い、ん、と
 ぶ、は、わ、る、声、わ、そ、な、ま、の、耳、に、わ、入、ら、ん、か
 この、様、な、ぶ、つ、そ、う、な、か、い、道、を、一、人、旅、と、は
 大、ま、ん、大、ま、ん、い、う、ま、い、す
 ナホ、つ、れ、に、成、り、ま、し、よ、う、後、先、ま、わ、れ、は、さ、よ
 ろ、つ、く、ま、な、こ、で、ど、ー、つ、と、せ、し、が、
 かの老人
 子、ほ、わ、い、
 から、入、る、事、わ、入、り、ま、し、ま、が、この、後、の、村、方
 で、ず、な、い、し、し、で、も、ま、逢、う、て、あ、ち、ら、の
 オ、方、で、わ、な、や、わ、ー、い、こ、ち、ら、り、方、で、わ
 わ、わ、ー、い、等、の、声、か、と、存、じ、ま、す、水、は、

日蓮経三

見まわすれば、けつき登りのよ侍様、お若り
 衆様には、御苦勞せんばんで、こゝにまするが
 わしや、はあつれも、何にもいりません、今時はや
 るな、あや、こゝに、し、し、
 ナホ、ち、う、ち、ら、し、ず、か、こ、さ、し、め、
 い、も、の、葉、で、ふ、か、り、よ、か、の、ん、し
 定、ま、れ、お、や、じ、う、ぬ、れ、が、ち、う、ち、し、ず、か、こ
 へ、し、め、や、お、か、や、な、の、葉、に、と、ま、る、歌、き
 ス、に、や、あ、こ、ね、え、そ、な、ま、の、か、こ、ろ、に、わ
 豊、年、満、作、日、蓮、終、り、書、付、紙、教、に、つ
 も、り、や、あ、四、五、拾、枚、金、か、が、す、に、つ、も、り、や、あ
 お、よ、そ、四、五、拾、兩、こ、の、定、ま、ま、が、こ、の、後
 の、村、方、で、黒、り、ま、な、こ、で、に、ら、ん、ど、仕、事
 そ、れ、を、父、あ、ん、こ、り、
 子、ほ、い、
 て、居、り、ま、す、も、の、か、持、つ、て、居、り、ま、す、事
 な、れ、ば、早、速、に、あ、げ、ま、す、水、と
 こ、う、が、ん、ぢ、の、持、つ、て、居、り、ま、す、も、の、わ
 わ、つ、ち、の、う、ま、ん、は、ん、こ、ん、ま、ん、せ、な、か、
 し、よ、つ、ま、る、ち、ゆ、ち、ゆ、ち、ゆ、う、じ、さ、の、

日蓮経四

子にぎりめし それより外のものわ 二の後の
 村方で ちり紙を三占程 かつて うとニろ
 之のひとと入れまばつかりて 何人にもニぞ
 いません
 定 なけりやあ仕方がねえ ならはとつあん
 子 二一同にまひりましよう
 子 お侍様お先
 定 父つあんま
 子 お侍様お先
 定 ならは父つあん 所一同にまひりましよう
 子 二一同にまひりましよう
 定 ありてて
 子 お侍様 どうなさいます
 定 はて困る事ぞなあ ニニいらに良
 子 お医者さんでもなにかいなあ
 定 空腹の虫とじつめられはなほぞなん
 じゆうを致し この虫のおみつる元はとん
 之は腹のへつあ故がやわり そんな
 の持つまにぎりめしを一つもれえてえ
 子 何其の様なものを 持つて
 居りますものか 持つて居ります事なれば

日蓮経五

子 早速にありませうけれど 二の後の村方で
 ぼろな白 大にはえらわれて やつてしま
 つにニぞいません
 定 なけりや仕方がねえ そんなの持つてる
 わつちゆうさん はんごんさんとやらと
 もれえてえ
 子 二一同にまひりましよう
 子 お侍様お先
 定 父つあんま
 子 お侍様 どうなさいます
 定 はて困る事ぞなあ ニニいらに良
 子 お医者さんでもなにかいなあ
 定 空腹の虫とじつめられはなほぞなん
 じゆうを致し この虫のおみつる元はとん
 之は腹のへつあ故がやわり そんな
 の持つまにぎりめしを一つもれえてえ
 子 何其の様なものを 持つて
 居りますものか 持つて居ります事なれば

日蓮経 八

午 其の後す所て御ざいますか
 定 どにて後す
 午 はいくゞはるか向うに秘森が見える
 あれそやういはる房舟の巻誕生寺様の
 表門には相違なしあの表門にてきつと
 お渡し申します
 定 ニーリや父つあん来春房舟の巻誕生寺
 様の表門にてきつと言葉がつかうそ
 ぞよ
 午 それまでわおかしなされて下さまし
 なむおどろほ大明神
 定 おやじこえんありますことならは
 午 かさねて（二人共）お目にかかりましよう
 定 どてりかわちのなぐ十鳥
 どうか吉原とやらさして急ぎうか
 午 どちらあの野郎のまねでもして見ようかなどてりかな
 ちようちん 吉原がいにちゆうほそくと
 んでいぢやがつた
 あの野郎もまなな解部ニのちんがれもまな
 ないしんい

日蓮経 九
定なんぞと

午 かんからかんのかんむすにてございます
 其のむこと娘に豊年斎作踊りまふほ
 えさせまはつかりにこのおほれおやじが
 こしよりの程もすて置いて所々方を
 かけまきようよめめるこのいちかんま
 今にてお前さんにお渡し申せば因之
 歸りてむこと娘に豊年斎作踊りま
 おほえさせる事は本事ませんおほえて
 しまう其の節送はおかしなされて下
 さいるしなむおどろほ大明神
 定 ニーリや父つあん婿と娘がぶくぶくの
 ちやんぶくぶくとおほえてしまつた其の
 節は父つあんどにて後す
 午 あまお前さんがすないなさいますのでがれ
 午 あの野郎は見れば見る程にわい顔
 してやがらこのかんがいがこわい顔
 をしておどかしてやろうか
 ううん 父つあんどにて後す ううん 父つ
 ンドにて後す （午一兵エ元位置に
 歸ッテッラ） このかんがいがこわい顔
 おどかしてやつたら父つあんどにて後す
 父つあんどにて後す（少さる声でやう）

